



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集

日高市

宿東遺跡

一般国道407号線埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第2分冊〉

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

口絵

序

例言

凡例

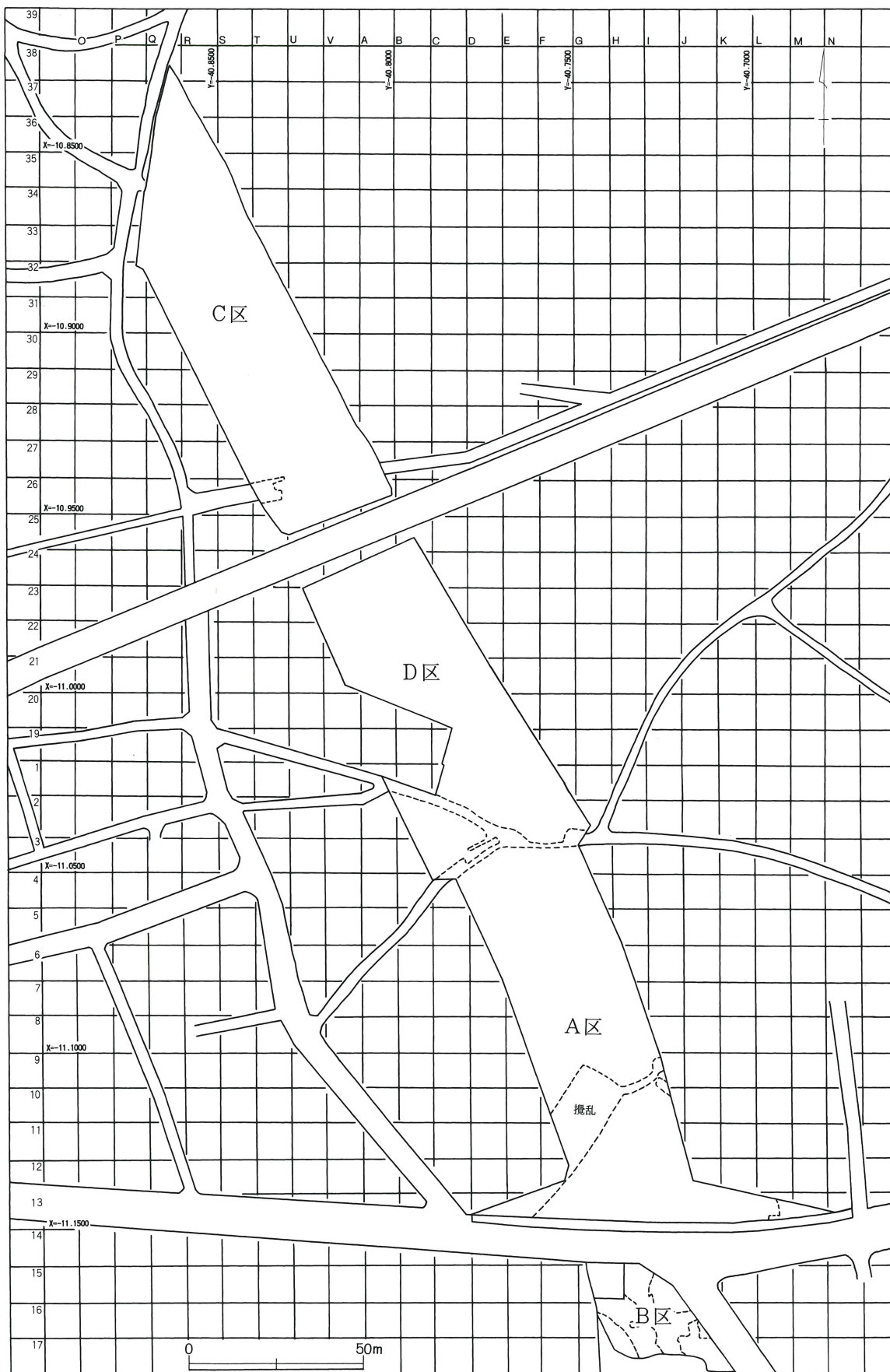
〈第1分冊〉

I 調査の概要	1	(1) 住居跡	347
1. 発掘調査に至る経過	1	(2) 土壌	379
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(3) 埋甕	381
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(4) 溝	382
II 遺跡の立地と環境	4	(5) グリッド出土土器	386
III 遺跡の概要	5	(6) 土製品	386
IV A区の調査	10	(7) 石器	388
1. 調査の概要	10	(8) 中・近世の遺物	393
2. 検出された遺構と遺物	14	VII D区の調査	394
(1) 住居跡	14	1. 調査の概要	394
(2) 掘立柱建物跡	250	2. 検出された遺構と遺物	397
(3) 土壌	253	(1) 住居跡	397
(4) 埋甕	306	(2) 掘立柱建物跡	525
(5) グリッド出土土器	312	(3) 土壌	525
(6) 石器	317	(4) 配石遺構	541
(7) 土・石製品	326	(5) 溝	543

〈第2分冊〉

V B区の調査	334	(6) グリッド出土土器	544
1. 調査の概要	334	(7) 石器	550
2. 検出された遺構と遺物	335	(8) 土・石製品	560
(1) 住居跡	335	VIII 結語	561
(2) 石器	343	1. 加曾利E式土器について	561
VI C区の調査	344	2. 加曾利E III式期の住居跡について	575
1. 調査の概要	344	3. 掘立柱建物跡	580
2. 検出された遺構と遺物	347	主要参考文献	582
		付編	584

調査区およびグリッド配置図



V B区の調査

1. 調査の概要

B区は今回発掘調査された範囲の最南端に位置している。遺跡の乗る台地の南縁辺にあたり、調査区の南壁外には下小畦川に面した段丘斜面が迫っている。北は県道川越日高線をはさんでA区に接している。

底辺35m、高さ30mの平行四辺形の調査区であるが北西の一角は現在墓地になっており調査不可能、残された部分も大部分が建物の基礎やごみ穴等による攪乱で破壊されており、実際に遺構確認が可能な部分は3割にも満たない状態であった。

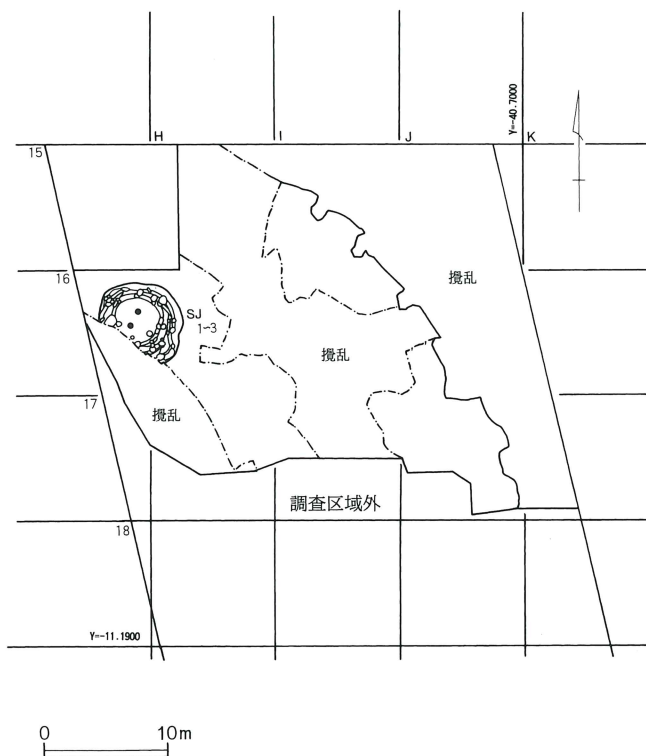
遺構と覚しき落ち込みは数カ所検出されたものの、いずれも床面や壁の立ち上がりが不明瞭なものばかりで、遺物の出土も希薄であり、最終的に遺構と認定されたのは第1～3号住居跡と命名した1カ所のみであった。

竪穴住居跡の詳細は本文の記載に譲るが、縄文時代中期後葉、加曾利E I式期の住居跡であり、今回調査された集落の中ではきわめて古い段階に属する遺構のひとつである。4期にわたる炉跡と、最大7重の壁溝を巡らせる著しい多重復の竪穴住居跡というありかたも、この住居跡を語るうえで欠かすことのできない点である。

この時期の住居跡はA区においても中央住居跡群の南端部で検出される。A区北半部およびこれに連続するD区の住居跡群中には、同時期の住居跡は発掘調査された範囲において1軒も存在しない。

一方、台地北縁のC区でも加曾利E I式の新旧の段

第296図 B区遺構全測図



階に属する住居跡群が検出されており、それ以降の時期の遺構はA・D区ほどには検出されていない。

従って、集落の初期=加曾利E式前半期において竪穴住居は台地の縁辺により密に分布していた可能性があり、台地中央に住居をはじめとする施設が集中するのは次段階の現象であるといえる。こうした集落全体の変遷については最終章の考察においてより詳しく触れることとする。

B区から出土した遺構・遺物に関しては、非常に限られた範囲の調査であり、その成果についてもA・C区等の成果と併せて考える必要があることはいうまでもないだろう。

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

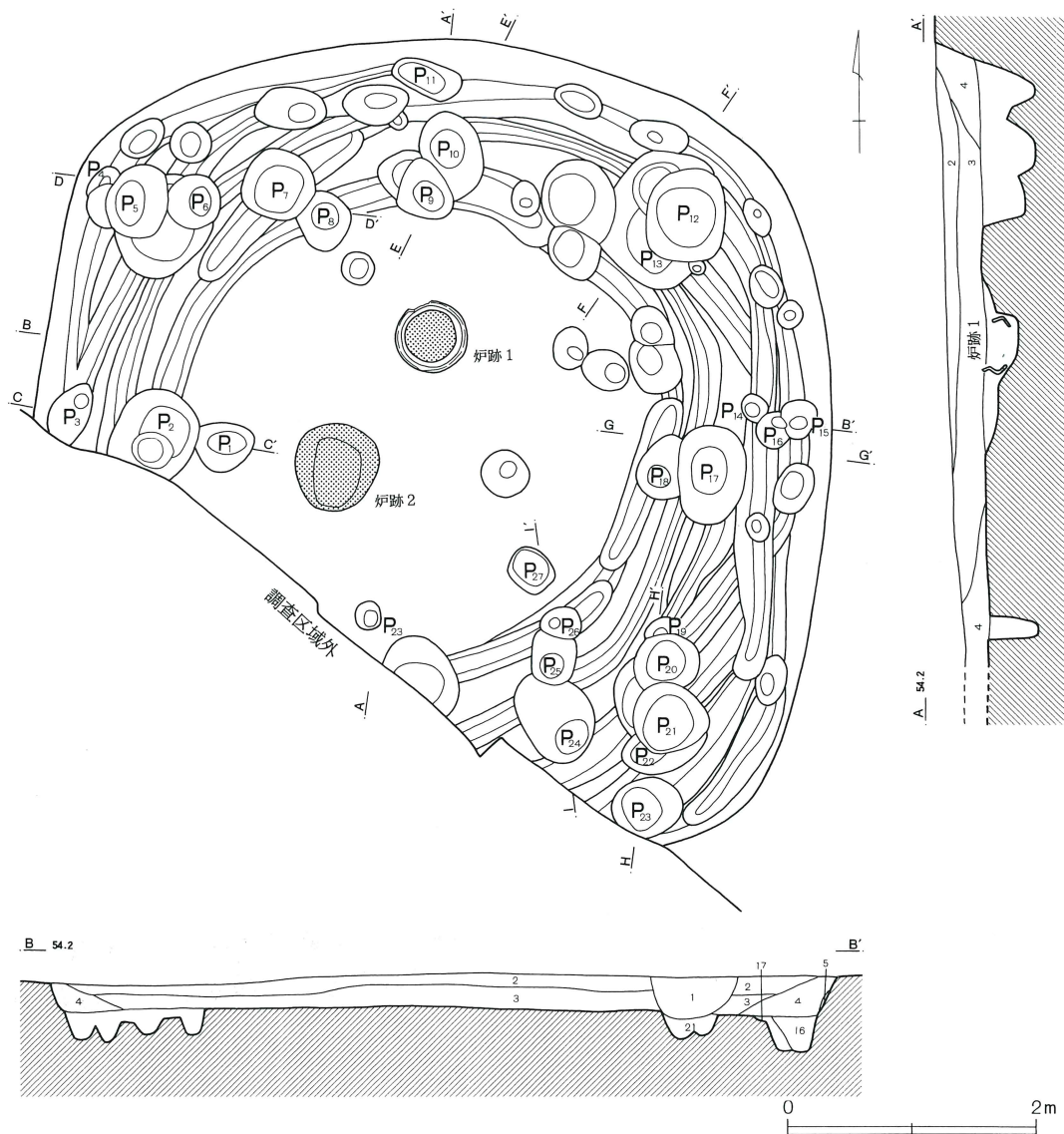
B区第1～3号住居跡（第297図～第302図）

今回B区で検出された唯一の住居跡である。G-16、H-16区に所在し、南西部分が調査区域外に外れている。

南北に長い隅丸六角形を呈するものと思われ、長径は不明、短径は6.3mを測る。主軸方向はほぼ真北を指す。

床面はほぼ平坦で、住居跡中央から南壁に向かって緩やかに傾斜している。壁高はもともと残りの良い北壁部分で35cmを測る。壁溝は3～7条が複雑に切り

第297図 B区第1～3号住居跡（1）



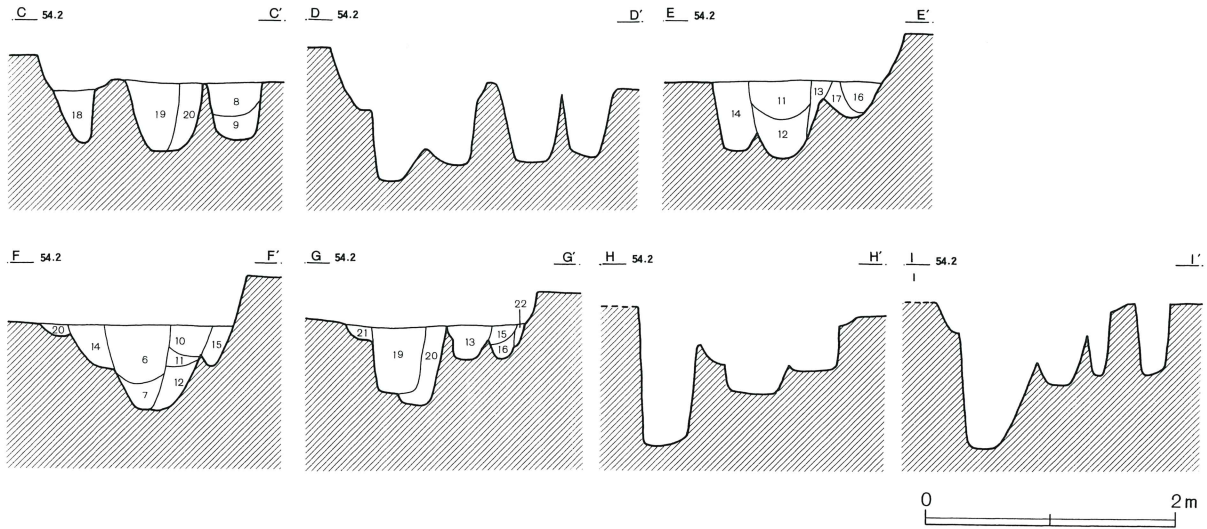
あった状態で検出されている。

炉跡は2基検出され、それぞれ炉跡1・2と命名した。炉跡1は主軸線上奥壁寄りで見出された。底部を欠いた浅鉢を埋設した埋甕炉である。炉体土器内部の焼土の堆積は顕著ではなかった。

炉体土器の撤去後、炉跡の掘り方を掘削したところ、炉体土器よりも一回り以上大きな長楕円形の掘込みを見出した。長径1.1m、短径0.81mで、主軸方向は住居跡のそれとほぼ等しい。炉体土器はこの長楕円形の掘り方の埋土を切って埋設されている。

この掘り方の周囲に沿って、小ピットが不規則に並

第298図 B区第1～3号住居跡(2)



B区S.J 1～3

- | | |
|--|--|
| 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物やや多く含む 締まり強 | 12 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 締まりやや強 |
| 2 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物少量、焼土粒子微量含む 締まり強 | 13 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 締まり強 |
| 3 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物少量、焼土粒子少量含む 締まり強 | 14 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子やや多く、炭化物微量含む 粘性強 |
| 4 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物少量、砂粒少量含む 締まりやや弱 | 15 褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く、炭化物微量含む 締まり強 |
| 5 褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 締まり弱 | 16 暗褐色土 : ロームブロック微量、ローム粒子やや多く、炭化物微量含む 締まりやや強 |
| 6 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり強 | 17 暗黄褐色土 : ローム粒子多く含む 締まりやや強 |
| 7 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり強 | 18 黒褐色土 : ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり弱 |
| 8 暗黄褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり強 | 19 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり強 |
| 9 黒褐色土 : ローム粒子やや多く、炭化物少量含む 締まり強 | 20 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多量、炭化物少量含む 締まり強 |
| 10 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 締まり強 | 21 黒褐色土 : ロームブロック微量、ローム粒子多量含む 締まりやや強 |
| 11 黒褐色土 : ロームブロック多量、ローム粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強 | 22 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 締まりやや強 |

んでいる。これらの小ピットは炉石埋設に伴う掘り込みと考えられ、本炉跡は炉体土器の埋設以前に石囲炉として機能していた時期があったものと考えられる。

炉跡1の南でさらに1基、旧炉の掘り方に切られた状態で、顕著な焼土の堆積を伴う炉跡を検出した。直径約70cmの不整形の地床炉であり、炉床面までの深さ23cmを測る。

以上のように、炉跡1は最低2度の改造を経験した3段階の炉跡の複合であるということになる。

炉跡2は床面中央部西寄りに位置する。不整形の地床炉であり、長径70cm、短径62cm、深さ10cmを測る。多量のローム粒子を含む暗褐色土が覆土上面を覆っていることから、この炉跡は炉跡1よりも古い段階のものと考えられる。

壁溝に重複して無数のピットが検出されている。ピットと炉跡・壁溝との対応関係は明らかにできなかったが、隅丸六角形プランの各コーナー付近と、東

壁および西壁のほぼ中間点に複数基が集中する。

このように本住居跡は、改造・つけ替えを含め4段階の炉跡を検出し、複雑に切り合った7本近い壁溝が検出されている。

したがって、本住居跡に関してはそれぞれ数回の拡張を伴った複数の住居跡が切り合っているものと考え、「1～3号」という、調査段階におけるやや変則的な呼称を存続させた。

遺物は前述の炉体土器以外に、縄文時代中期後葉の土器片・石器が出土している。大半が覆土中層から下層の出土である。

出土土器(第301図・第302図)

1は炉体土器である。胴部中段がくの字に張り出す大型の浅鉢で、胴下半部を欠失する。口縁は無文で極端に肥厚しつつ外反し、口端は平坦である。

胴上半部に文様帯を持つ。交互刺突を伴う隆帯によって口縁部の無文帯との間を区画し、胴部中段の張

り出し部分には刻みを伴う断面三角形の隆帯が巡らされ、無文の胴下半部との境を区画している。

上下の隆帯の間に刻みを伴う隆帯によって横楕円形の区画が構成され、内部には単沈線の渦巻文が2単位対向して眼鏡状のモチーフを構成する。

隣り合う横楕円区画の間には襷状の隆帯が巡り、この隆帯の上下に生じる三角形の空間にも渦巻文が描かれる。

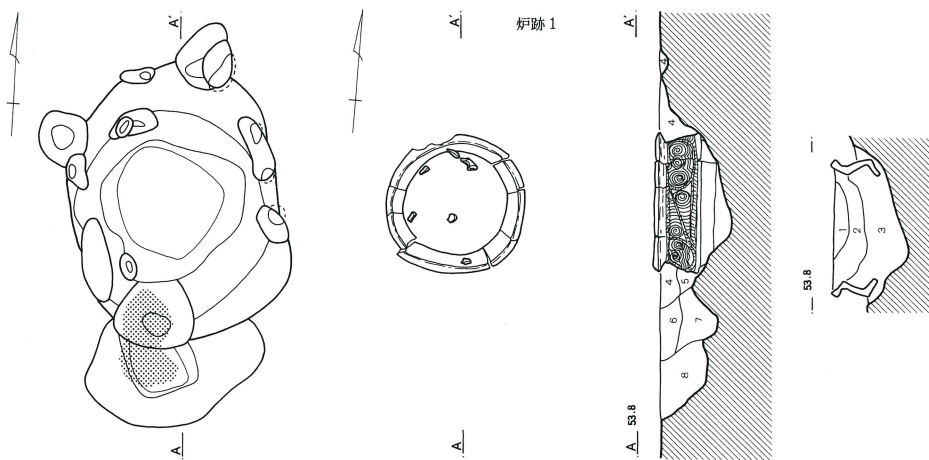
内外面ともに二次焼成による器面の荒れやススの付着がみられ、隆帯も至る所で剥落している。現存高

17.5cm、最大径53.2cmを測る。

2～5はキャリパー類深鉢で、口縁から頸部にかけて残存する。2は小波状口縁で、1カ所に大型の突起を伴うものと思われる。二本隆帯により入り組み文が描かれ、波頂部直下では橋梁状の把手と接続している。地文は縦位の撚糸文で、頸部には無文帯が存在する。

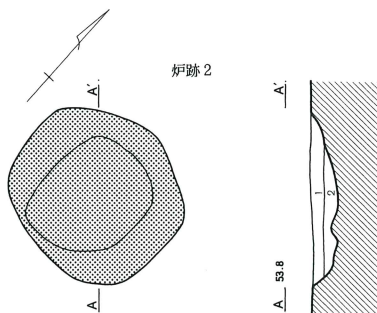
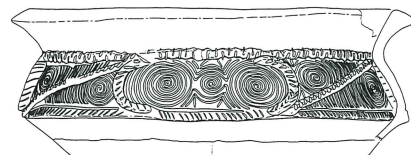
3は二本隆帯による入り組み文が横位に展開する。水平口縁で、口縁部の繫弧文から連続する中空の突起が付されるものと思われる。モチーフ接点の渦巻文は上向きに突出し、ここから頸部の区画線にかけて3本

第299図 B区第1～3号住居跡炉跡



B区S J 1～3 炉跡1

- 1 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子極微量含む 締まりよし
- 2 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む 締まりよし
- 3 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 締まりよし
- 4 黒褐色土 : ローム粒子微量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 5 暗褐色土 : ローム粒子微量、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 6 暗灰白色土 : 粘土多量、ローム粒子微量、焼土粒子少量、炭化物微量含む
- 7 黒灰褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり強
- 8 暗灰褐色土 : ローム粒子やや多く、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強



B区S J 1～3 炉跡2

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量含む 締まり強
- 2 暗赤褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土粒子多量、炭化物少量含む 締まり強



一組の隆帯が垂下する。地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。頸部には無文帯が存在する。

4は水平口縁で一部に何らかの突起が付されるものと思われる。3に類似の繫弧文が施文され、モチーフ接点の渦巻文が上向きに突出するのも同様である。地文は縦位の燃糸文で、頸部に無文帯が存在する。

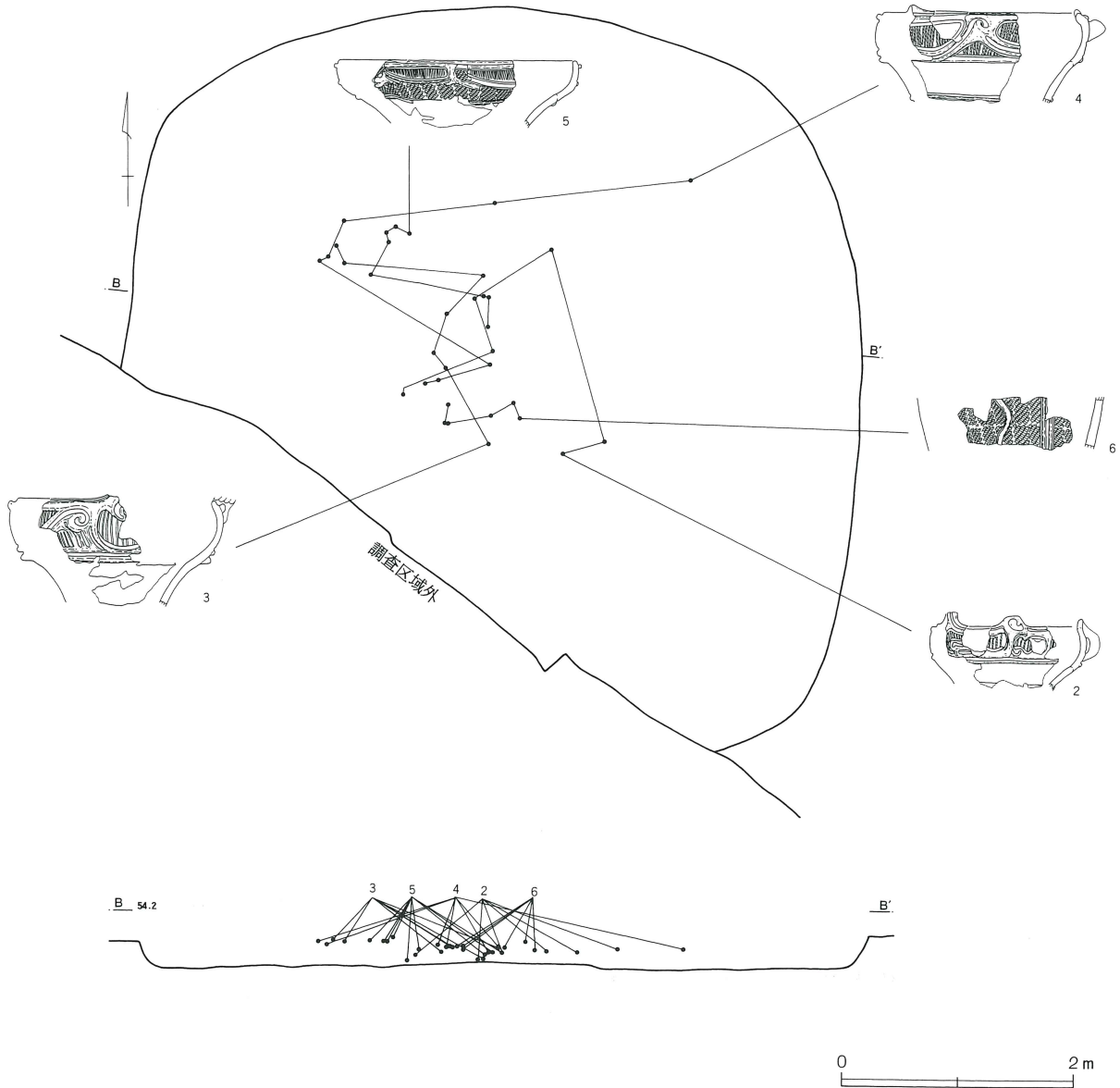
5は繫弧文の土器である。二本隆帯による繫弧文が描かれ、モチーフの接点には渦巻文が配される。弧状の区画内部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。

繫弧文から下にはR L単節縦位回転の縄文が施文さ
第300図 B区第1～3号住居跡遺物分布図

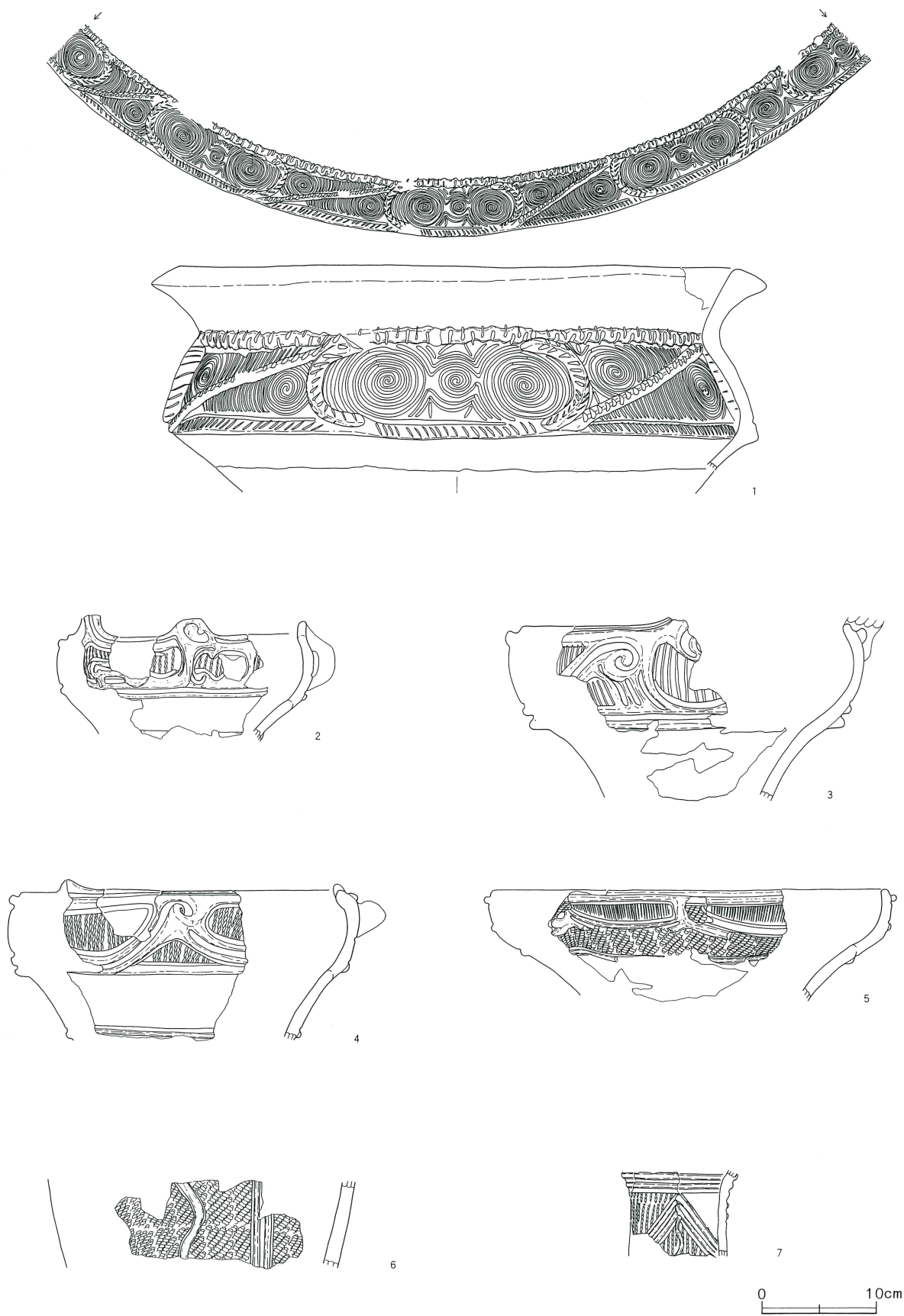
れ、下端は1条の隆帯で区画される。この縄文施文部分の存在によって、口縁部文様帯は頸部の半ばにまで拡大されている。隆帯区画から下には無文帯が存在する。

6は深鉢胴下半部である。二本隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はR L単節の縄文が縦位回転で施文される。

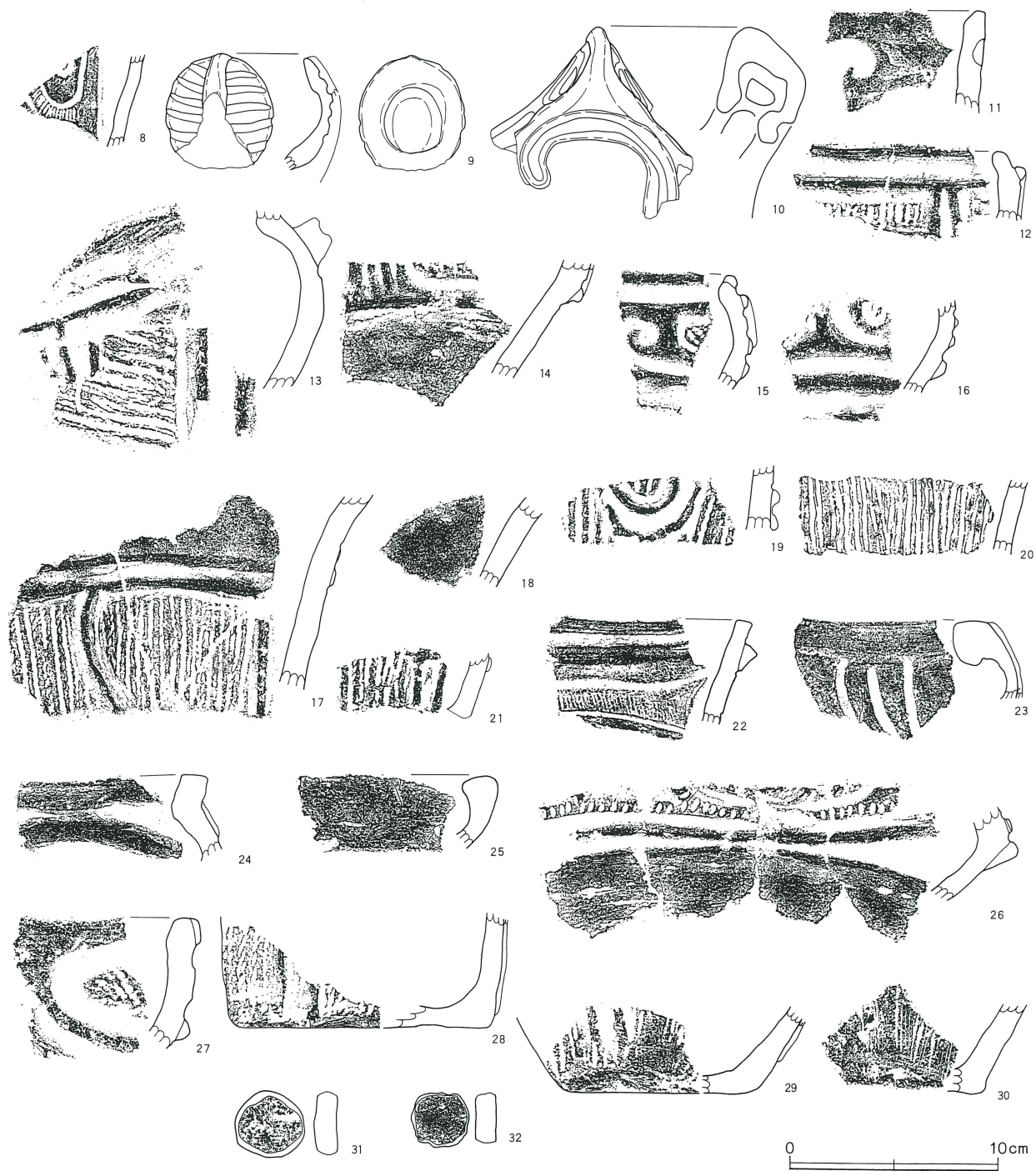
7は小型深鉢の胴上半部である。胴部はほぼ垂直に立ち上がる円筒形で、頸部との境を2本の隆帯で横位に区画する。器形はここから強く外反する。胴部は二本隆帯を鋸歯状に巡らせることで三角形の区画を構成



第301图 B区第1~3号住居跡出土土器(1)



第302图 B区第1~3号住居迹出土土器(2)



し、三角形の頂点からは一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。地文は縦位の撚糸文である。

8は勝坂系の深鉢胴部である。刻みを伴う偏平な隆帯によって区画文が描かれる。9は貝殻状の突起で、深鉢口縁部に付されるものと考えられる。背面には隆帯とこれに交差する平行沈線によって肋骨状のモチーフが描かれる。

10はキャリパー類深鉢の口縁部に付される中空の把手である。3方向からの渦巻文が合成された多面体で、口縁部文様帯における二本隆帯の横S字モチーフの末端が変化したものである。C区第6号住居跡出土の深鉢口縁部(第330図1)に同形の中空把手が完存している。

11は板状の突起で頂部平坦な台形を呈する。わらび手状の沈線が描かれ、下方に円形の貫通孔を有するものと思われる。12はキャリパー類深鉢の口縁部である。二本隆帯による十字文がみられ、地文は縦位の撚糸文である。

13はやはりキャリパー類深鉢の口縁部文様帯で、二本隆帯による曲線モチーフが描かれる。モチーフの接点からは縦位の隆帯が垂下し、文様帯下端の区画に連結するものと思われる。地文は横位の撚糸文である。

14は口縁部文様帯下端を区画する横位の隆帯がみられ、頸部に無文帯が存在する。

15・16は隆帯+沈線の渦巻文が施文される口縁部文様帯である。15の地文はRL単節の縄文である。

17は隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文がみられ、頸部に無文帯が存在する。両者の境は横位の二本隆帯によって区画される。地文は縦位の撚糸文である。18は無文の頸部である。

19は地文撚糸文上に二本隆帯によるJ字状モチーフがみられる。20は地文撚糸文のみの胴部、21は二本隆

帯の懸垂文が垂下する底部付近の破片である。

22は直線的に開く深鉢口縁部で、緩やかな波状口縁を呈するものと思われる。口唇直下に断面三角形の隆帯が巡り、頸部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。胴部との境は1条の沈線によって区画され、沈線から下は無文化する。

23はコの字形に内屈する口縁部である。口端は内屈し、口唇内面が著しく肥厚する。口端は平坦である。口縁外面には偏平な隆帯に沈線のなぞりを加えた半肉彫り風の文様が施文される。

24はくの字に外屈する口縁部である。口縁直下に段を有し、偏平な隆帯による曲線モチーフが描かれる。胴張りの浅鉢の口縁部であろう。

25は無文の口縁部で、口端肥厚して内面に稜をもつ。浅鉢ないし小型の深鉢の口縁部と思われる。

26は胴上半部の文様帯を持つ浅鉢である。胴部中段がくの字に張り出し、ここに受け口状の隆帯が巡らされる。この隆帯から上に刻みを伴う隆帯によって楕円形の区画文などが描かれる。胴下半部は無文である。

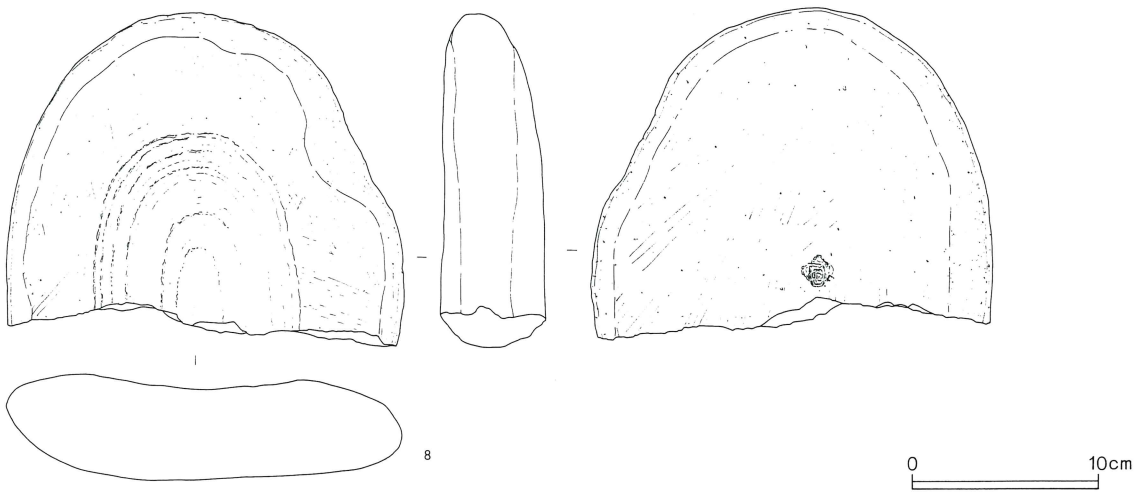
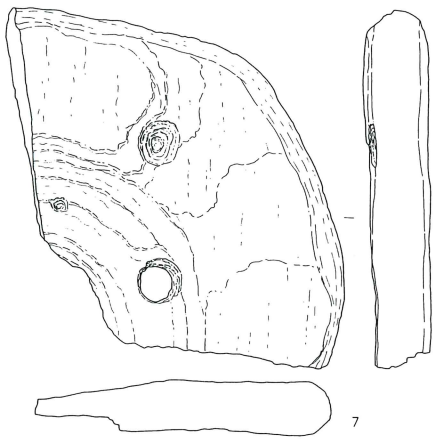
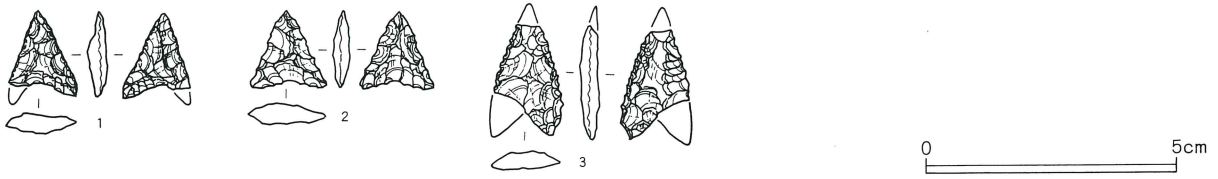
27は中期末葉の土器で、覆土中への混入であろう。キャリパー類深鉢の口縁部で、隆帯+沈線の渦巻文がみられる。地文はLR単節の縄文が施文される。

28~30は底部の破片を一括した。いずれも深鉢の底部である。28・29は縦位の撚糸文を地文とし、二本隆帯の懸垂文が垂下する。30は地文として櫛歯状工具による縦位の条線が施文され、一本隆帯の懸垂文が垂下する。

31・32は土器片を転用した土製円盤である。いずれも無文の胴部破片を打ち欠いて円盤状に整形したものである。周囲の断面には擦痕が観察される。

31は直径3cm、32は直径2.5cmの不整形円形である。

第303图 B区出土石器



図版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第303図 1	SJ1~3	石 鏃	(1.40)	1.40	0.40	0.47	黒 曜 石	
第303図 2	SJ1~3	石 鏃	1.50	1.50	0.40	0.51	チャート	
第303図 3	SJ1~3	石 鏃	(2.30)	(1.40)	3.50	0.86	黒 曜 石	
第303図 4	SJ1~3	磨製石斧	(13.05)	4.25	3.75	352.00	砂 岩	
第303図 5	SJ1~3	打製石斧	(10.10)	4.30	1.40	93.00	砂 岩	
第303図 6	SJ1~3	磨 石	6.70	4.90	3.90	244.00	花 崗 岩	
第303図 7	SJ1~3	石 皿	(16.90)	(15.90)	3.00	1485.00	絹雲母片岩	
第303図 8		石 皿	(16.70)	21.30	5.30	3000.00	安 山 岩	

(2) 石器 (第303図)

B区からは若干の石器が出土している。器種は石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿で、石皿1点を除いて第1～3号住居跡覆土中からの出土品である。いずれも縄文時代中期後葉に属するものと考えられる。

第303図1～3は石鏃である。1・3は凹基、2は平基に近い凹基である。石質は1・3が黒曜石、2はチャートである。

4は磨製石斧である。刃部は欠損し、胴部は断面楕円形である。石材は細粒の砂岩が用いられている。

刃部先端から背面にかけて広い範囲の欠損がみられる。これは着柄状態での使用時に、刃部に対し垂直方向、斜め下方からの加撃により生じたものであろう。破断面には部分的に細かな敲打が認められ、破損後に刃部の再生を試みたか、あるいは敲打具としての再利用が図られたことをうかがわせる。

5は打製石斧である。胴部中央がわずかにくびれる短冊形であったと思われるが、頭部を欠損している。破断面に細かな表裏両面からの数回の剥離がみられ、

破損後の再利用があったことをうかがわせる。石材は砂岩である。

6は磨石である。長手側の4面に使用面を残す直方体の磨石で、中央部分で折損し、残存する小口側に自然面を残す。長楕円形の自然礫を加工したものであろう。

表面は風化が激しく、被熱している可能性もある。

7は石皿片である。不整円形の石皿のほぼ1/4が残存している。石材は絹雲母片岩を使用している。

板状の自然礫の片面を使用している。破損後は凹石として再利用されており、窪みの一つは頻繁な使用により裏面まで貫通している。

8も石皿片である。楕円形の自然礫の平坦な面を使用したものとみられるが、あるいは周縁に若干の整形を加えているかもしれない。全体の1/2が残存している。

表面中央部に長楕円形の窪みを生じているが、それ以外の平坦な部分にも擦痕が残される。裏面にも擦痕が残り、中央部分が凹石として転用されている。石材は安山岩が使用されている。

VI C区の調査

1. 調査の概要

C区は今回の調査範囲の最北端に位置し、地形的には遺跡の乗る台地北の段丘斜面にあたっている。25～29ラインまではほぼ平坦であるが、調査区中央の30ライン付近には小畔川に面した段丘斜面が迫っている。調査区北西部を横切る市道の下付近から小谷が入り込み、先端はS-27区付近まで及んでいる。

C区において検出された遺構の種類および数は、住居跡7軒、土壇4基、埋甕2基、溝16条であった。これらのうち溝の全てと土壇2基の時期が出土遺物や覆土の状態から近世以降に比定され、それ以外の遺構は全て縄文時代中期後葉から末葉のものと考えられた。

縄文時代の遺構の分布は調査区南半の平坦部に集中しており、特に川越線とこれに並行して走る市道の間からは合計4基の住居跡と2基の土壇、1基の埋甕が検出された。この他、調査区中央から北東に向かって延びる尾根に沿って、3軒の住居跡と1基の埋甕が間隔をおいて分布している。

住居跡は加曽利E I式の新旧の段階に属するものが6軒、同Ⅲ式に属するものが1軒で、他の調査区に比べ明らかに古い様相を呈している。加曽利E式前半期の住居跡はC区以外では、B区からA区南半部にかけて散漫な分布を示しており、台地中央部にあたるD区では全く検出されていない。

このように、今回の調査で検出された該期の遺構の分布は、台地を南北に横切る調査区の南端と北端にそれぞれ集中する傾向が認められる。周辺地形の中における遺構の配置は、前章の冒頭で述べたように、西から東へと延びる台地の縁辺を巡って散漫に分布するか、あるいは台地の北と南にそれぞれ中心を持つ双分的なありかたをしているものと思われる。

中期末葉の住居跡はC区においては1軒のみ検出さ

れたが、これは隣接するD区の住居跡群の延長としてとらえることができるだろう。次章で述べるとおり、D区における中期末葉の住居跡は、南半部で前段階の遺構も含めた著しい重複を示すほか、北半部では2～3軒単位の小群をなして広範囲に分布しており、C区で検出された1軒も、やはり同様の小住居跡群の一角を占めるものであろう。

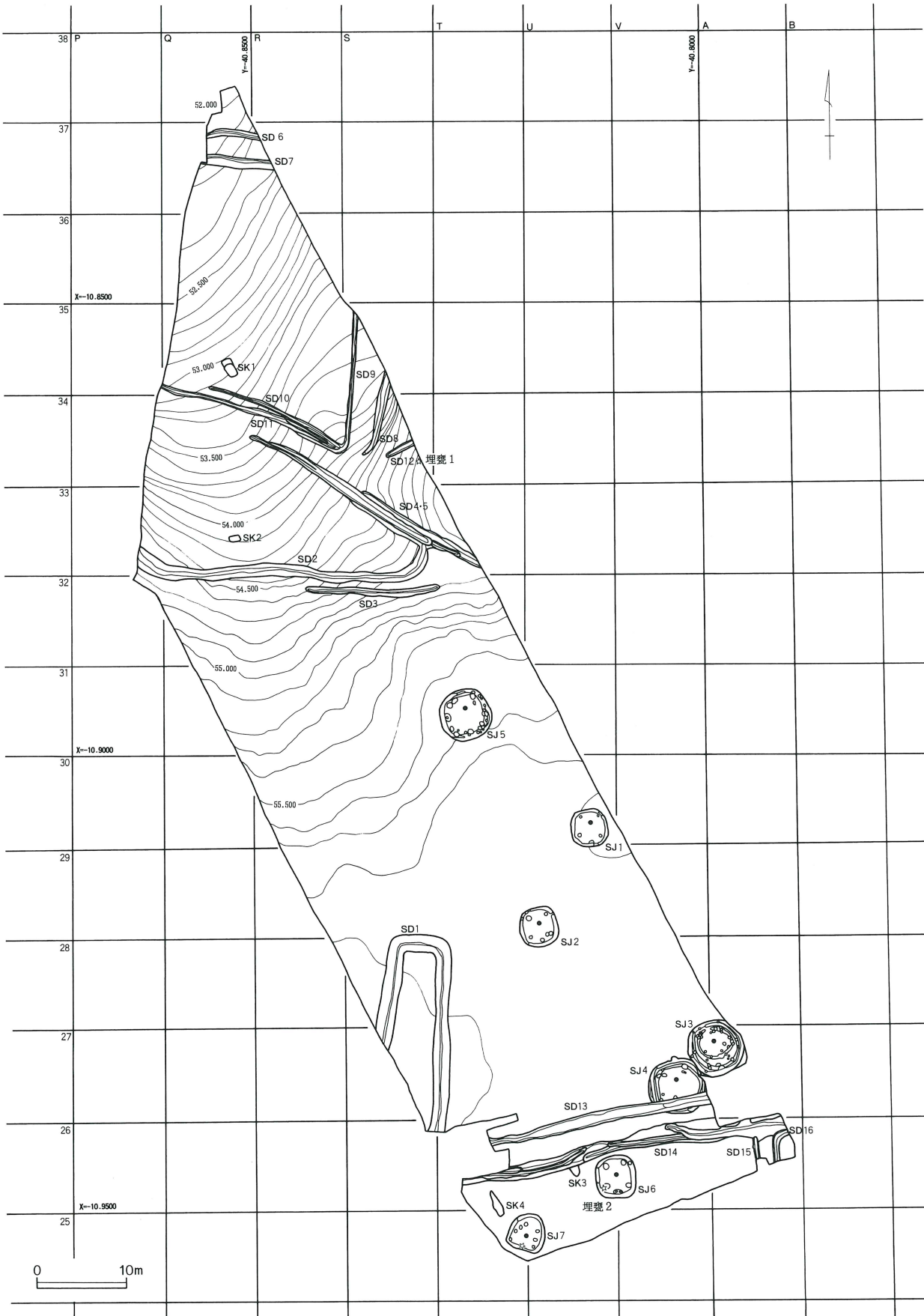
遺構検出面において直に炉跡や壁溝を検出したことからわかるとおり、遺構上面が著しく削平されており、さらに加曽利E I式期の住居跡と比べると構築時の堅穴の掘り込みそのものが浅くなっているものと思われる。

炉跡その他の施設を失っている住居跡も相当存在するものと思われる、例えば2基検出された単独埋甕も、本来は住居跡に付随するものであった可能性もあるわけだが、周囲はトレンチャーや植栽による攪乱がひどく、表面観察によって壁溝や柱穴を検出しうる状況にはなかった。

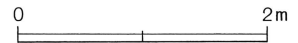
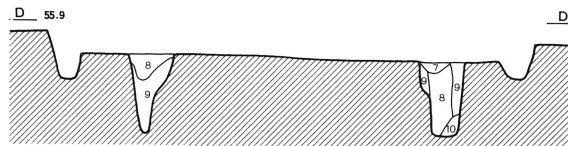
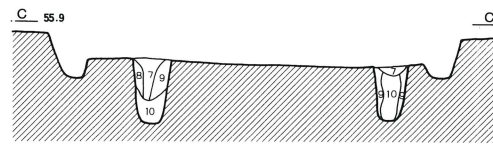
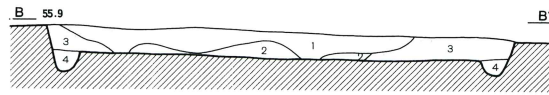
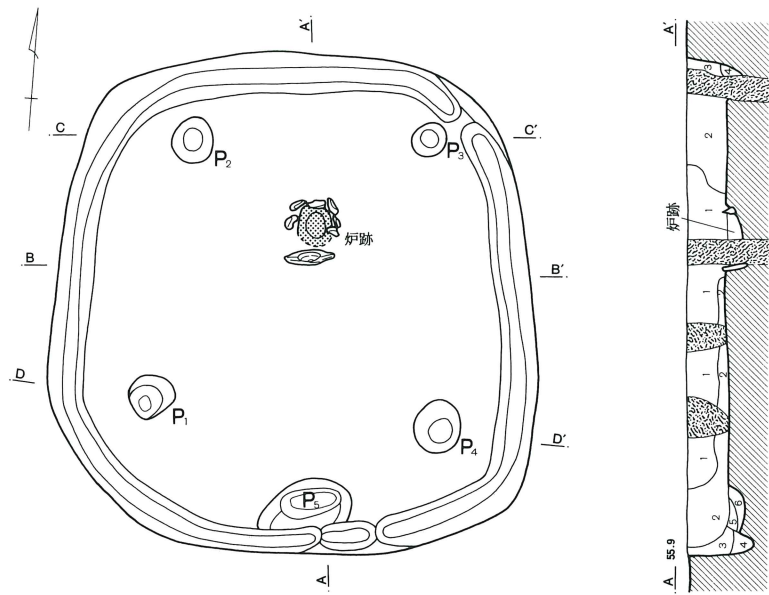
縄文時代の土壇は断面V字の陥とし穴である。規模と主軸方向が共通するもの2基が10m間隔で並列する、いわば「定石通り」の配置である。遺物は出土していないが、当然のことながら周辺の住居跡群と共時的な関係にはなかったものと考えられる。注目されるのは、陥とし穴の掘り方の変更が層位的に確認できたことである。

近世以降の遺構群は、台地北縁の平坦部分と、段丘斜面中腹の2カ所にそれぞれ集中している。溝は一部が現在の市道と並行していることから、農道に伴う側溝や地割りの溝が大半を占めているものと考えられる。こうした中で、末端がコの字状に屈曲して長方形の区画をつくり出す第1号溝の存在は異色といえる。

第304図 C区遺構全測図

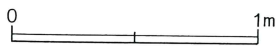
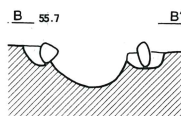
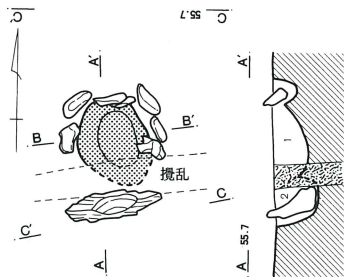
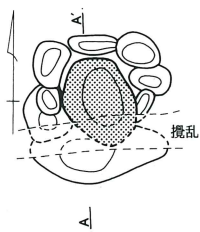


第305図 C区第1号住居跡



炉跡

掘り方



C区S J 1

- 1 黒褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性あり 締まりよし
- 2 黒褐色土 : ローム粒子少量、ロームブロック少量含む 粘性有り 締まりよし
- 3 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロックやや多く含む 粘性有り 締まりよし
- 4 暗黄褐色土 : ローム粒子極多量、ロームブロック若干含む 粘性有り 締まりよし
- 5 暗褐色土 : ロームブロック少量含む 粘性有り 締まりよし
- 6 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロックやや多く含む 粘性有り 締まりよし
- 7 黒褐色土 : ロームブロック極少量含む 粘性有り 締まりよし
- 8 黒褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性有り 締まりよし
- 9 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く含む 粘性有り 固く締まっている
- 10 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性有り 締まりよし

C区S J 1 炉跡

- 1 黒褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性欠く 固く締まっている
- 2 暗黄褐色土 : 再堆積ローム 焼土粒子若干含む 炉構築土

2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

C区第1号住居跡（第305図～第307図）

U-29・30区に所在する。平面形は南に若干開く隅丸長方形であり、規模は長径約4.0m×短径約3.75mを測る。壁高は最も残りの良いところで31cmである。主軸方向はN-3°-Wである。

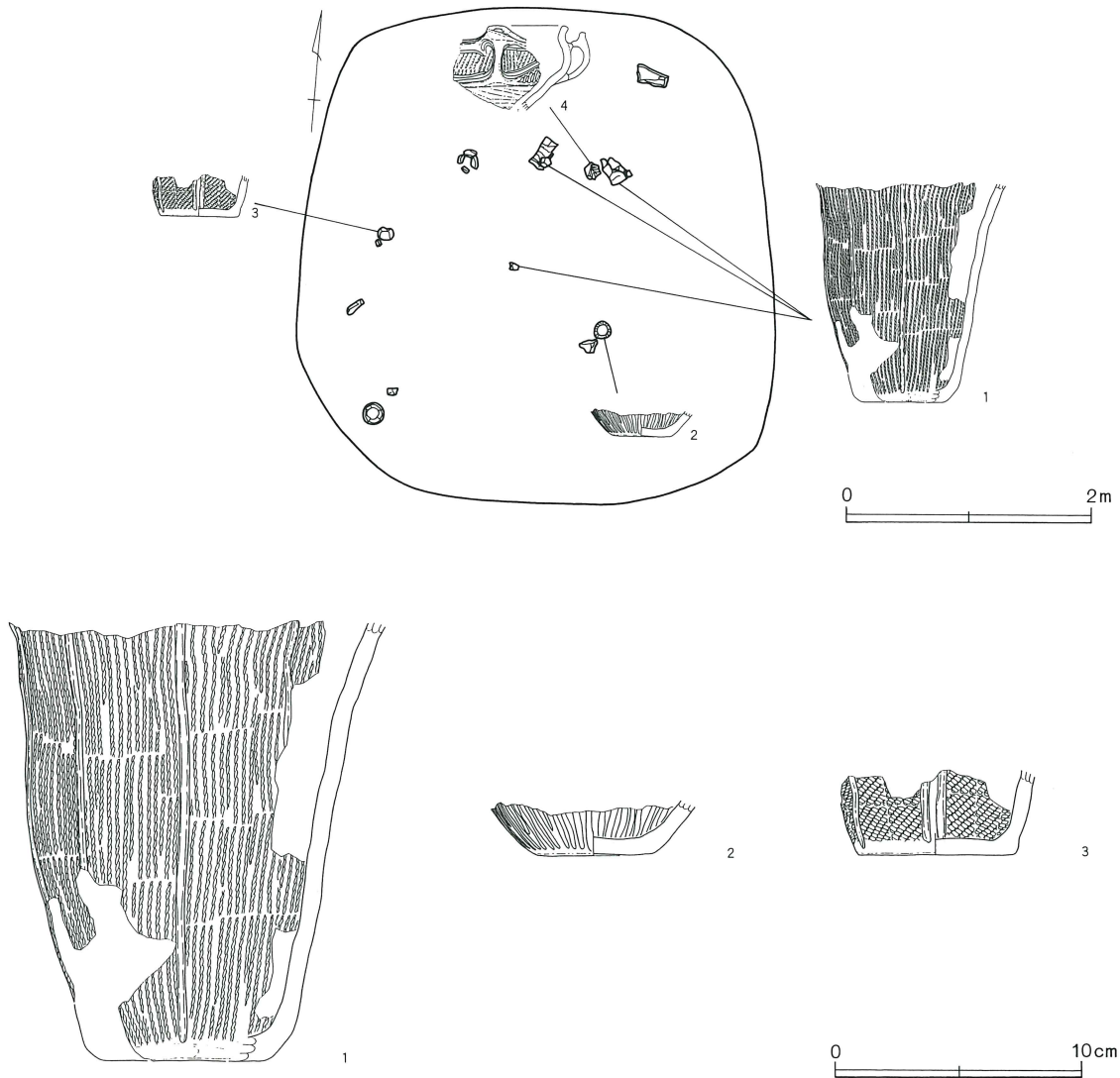
床面上の四隅のコーナーにそれぞれ4本のピットを配する。ピットの深さは36～54cmを測る。壁溝は北東コーナーの一部を除いてほぼ全周する。建て替えや拡張の痕跡は認められない。主軸線上南端壁際には出入り口に伴う施設の痕跡と思われるピットが存在する。これは東西に長い不整楕円形のピットで、一端を壁溝

に切られている。長径60cm、短径37cm、深さ10cmを測る。

床面はほぼ平坦で、炉跡から南壁にかけて若干傾斜しており、特に南東コーナー付近が他よりも低くなっている。

なお、平面図上では表現しなかったが本住居跡の床面は数カ所をトレンチャーによる攪乱によって破壊されている。炉跡は石囲炉で、主軸線上やや奥壁寄りに位置する。平面形は長径50cm、短径42cmの隅丸長方形で、炉床までの深さは15cmを測る。東西に走るトレンチャーの攪乱によって中央やや南寄りの部分を破壊されており、それ以外では炉石はほぼ全周する。全体に

第306図 C区第1号住居跡遺物分布図



第307図 C区第1号住居跡出土土器



長径15cm前後の河原石を用いて構築されるが、炉南辺を構成する石材には石皿片（第350図23）が転用されている。遺物は縄文時代中期後半の土器・石器が出土している。

出土土器（第307図）

1は深鉢胴部である。全面に撚糸文が施文され、一本隆帯の懸垂文が垂下する。現存高30cm、最大径24.6cm、底径11.2cmを測る。

2は小型の深鉢底部である。棒状工具による集合沈線が縦位に施文される。現存高3.7cm、最大径14cm、底径7.7cmである。

3も深鉢底部である。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文され、二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。現存高5.8cm、最大径13.3cm、底径10.8cmを測る。

4は横S字文が立体化した橋梁状の把手を持つ深鉢口縁部である。小波状口縁を成し、口端上にも文様を描かれる。地文は横位の撚糸文で、頸部に無文帯が存

在する。

5は刻みの付いた隆帯によって文様を描かれるもので、深鉢ないし浅鉢の胴上半部と考えられる。

6はキャリパー形の深鉢口縁部で、棒状工具による入り組み状の渦巻文が描かれる。この渦巻文はB区第1～3号住居跡炉体土器や、C区第6号住居跡出土の小型精製深鉢（第330図2）の胴部文様にも共通するモチーフである。

7・8はキャリパー類の口縁部である。二本隆帯で上下が区画される口縁部文様帯である。地文は7が撚糸文、8が単節縄文である。9～11は同じくキャリパー類の頸部である。9・10は頸部無文帯を持ち、11は地文の集合沈線が頸部にまで施文される。12は縦位の撚糸文のみが施文される胴部破片である。

13・14は無文の浅鉢口縁部である。13は胴上半部に最大径を持ち、口縁部が肥厚しつつ外屈する。15は胴部中段がくの字に張り出す浅鉢の胴上半部で、沈線により幾何学紋様を描かれる。

C区第2号住居跡（第308図～第311図）

U-28・29区、V-28・29区に所在する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径4.38m、短径4.08mである。主軸方向はN-11.5°-Wである。壁高は最も残りの良い部分で22cmである。壁溝は北東および南西の一部を除いて全周し、切り合いや重複はみられない。

床面上の各コーナー付近に5本のピットを持つ。明らかに柱痕の観察されたものはなかった。深さは50～70cmを測る。5本の柱穴のうちP4とP5はほぼ同一地点に東西に並ぶため、本住居跡は上屋の建て替えが行われた可能性がある。ただし、壁溝に重複がみられないため、面的な拡張は伴っていないものと思われる。これらの他、北西コーナーの壁溝中にも2本のピットが存在する。床面はほぼ平坦で、南に向かってごくわずかに傾斜する。

炉跡は埋甕炉で、炉体土器の外周南縁に1点のみ長楕円形の河原石を伴う。炉床は著しく焼けており、炉体土器も被熱の痕跡を示すものの、覆土中への焼土の堆積は少量である。炉床までの深さ28cmを測る。この炉跡の掘り方は炉体土器が収まる部分の他に、これを取り巻くようにして1段浅い皿状の掘り込みを持っている。炉体土器南縁に残された石材の存在から察するに、上屋の建て替えに際し石囲炉から埋甕炉への改造が行われた可能性がある。

主軸線上南端、壁高の立ち上がりから約15cmほど距離をおいて出入り口に伴う施設の痕跡と思われるピットが存在する。平面形は長径44cmの不整楕円形で、深さ7cmの、ごく浅い皿状の掘り込みである。

本住居跡からは縄文時代中期後葉を中心とした遺物が出土している。

出土土器（第310図・第311図）

1は炉体土器である。深鉢胴部中段から頸部にかけての部分を使用しており、胴下半および口縁を欠失する。全面に縦位の撚糸文のみが施文される。また、頸部無文帯も存在しないものとみられる。現存高22cm、最大径43cmを測る。

2はキャリパー類の深鉢の口縁部である。二本隆帯

による渦巻文が横位に展開する。また、口縁部直下を巡る隆帯と文様モチーフがごく短い3本一組みの隆帯によって連結される。地文は横位の撚糸文である。現存高7.2cm、最大径44cm、口径39.5cmを測る。

3は小型のキャリパー類深鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。平行沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。底部の裾付近では横位の削り整形が観察される。現存高6.8cm、底径7.2cmを測る。

4はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯から頸部にかけての大破片である。口縁部と頸部の境を横位の隆帯によって区画する。口縁部には二本隆帯によって渦巻モチーフが描かれる。地文は横位回転の撚糸文である。胴部には懸垂文等は施文されず、縦位の撚糸文のみが施文される。頸部無文帯はみられない。現存高20.7cm、最大径43.5cmを測る。

5は小型深鉢の胴下半部である。胴部中段に刻みを伴う隆帯による窓枠状の区画をつくり出し、内部に縦位の沈線が充填される。底部は無文で縄文等は施文されない。胴部と底部の境はくの字に張り出して稜を成す。現存高11cm、最大径11cmを測る。

6は無文の浅鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存し、底部を欠失する。胴部上半に最大径を持ち、口縁部は肥厚して外屈する。現存高20.6cm、最大径43.5cm、口径38.8cmを測る。

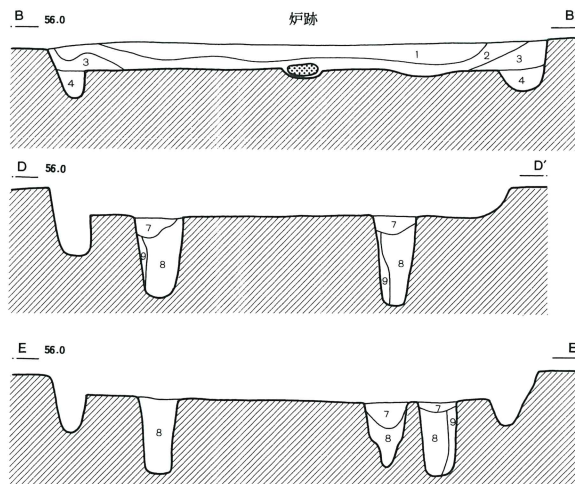
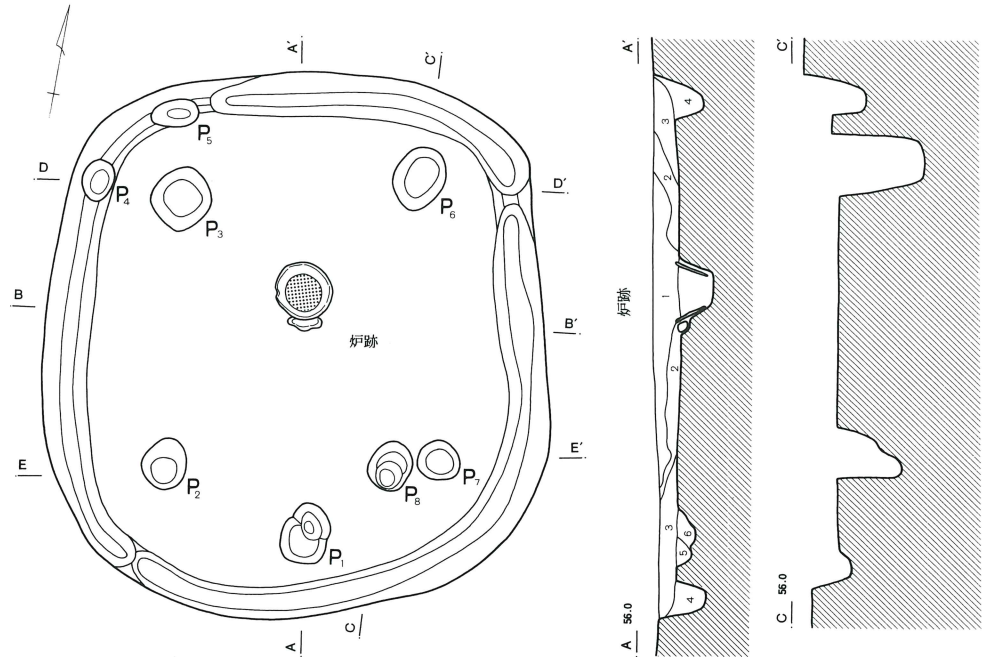
7も無文の浅鉢で、胴下半部である。現存高11cm、最大径39.8cm、底径10cmを測る。

8～10は中峠系の個体である。8は口縁で、筒形の器形が想定される。縦位の沈線が密に施され、これらを横切るように横位の短沈線や円文などが描かれる。

9・10は扁平な隆帯とこれに並行する沈線によって半肉彫り的な文様が描かれる。

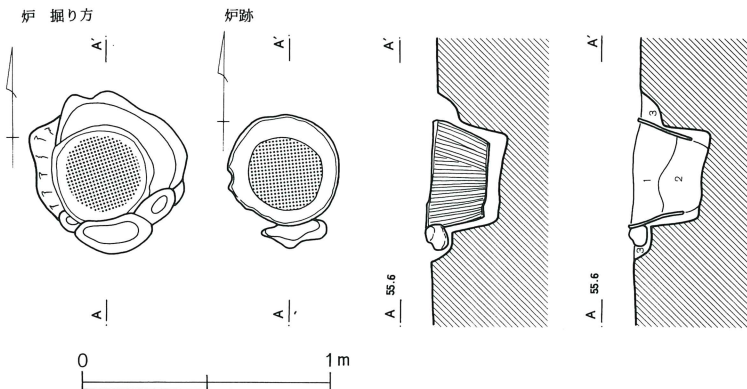
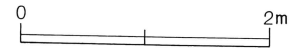
11は口縁部で、口唇直下に横楕円形の区画を持つ。胴部にはRL単節の縄文が縦位回転に施文される。12は頸部にくびれを持ち、そこから直線的に開く口縁である。口唇直下に刻みを伴う隆帯が巡る。緩やかな波状口縁を成し、波頂部からは2本一組みの隆帯が垂下

第308図 C区第2号住居跡



C区S J 2

- 1 黒褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む 粘性有り 締まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性有り 締まりよし
- 3 暗褐色土 : ロームブロック極少量、焼土ブロック極少量含む 粘性有り 締まりよし
- 4 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 貼床の一部 粘性有り 締まりよし
- 5 第4層に似る
- 6 暗褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性有り 固く締まっている
- 7 黒褐色土 : ロームブロック少量、炭化物極少量含む 粘性有り 締まりよし
- 8 黒褐色土 : ロームブロック多量、炭化物多量を含む 粘性有り 締まりよし
- 9 暗褐色土 : ロームブロック極めて多く含む 粘性有り 固く締まっている



C区S J 2 炉跡

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性欠く 締まりよし
- 2 極暗褐色土 : ロームブロックやや多く、焼土ブロック少量含む 粘性欠く 締まりよし
- 3 黒褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック極少量含む 粘性欠く 締まりよし

する。口縁部から頸部にかけては無文で、胴部との境を1条の沈線によって区画する。胴部には縦位回転の捺糸文が施文される。13は深鉢胴上半部から頸部にかけての破片である。頸部は無文で胴部との境を、刻みを伴う1条の隆帯によって区画する。胴部には櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

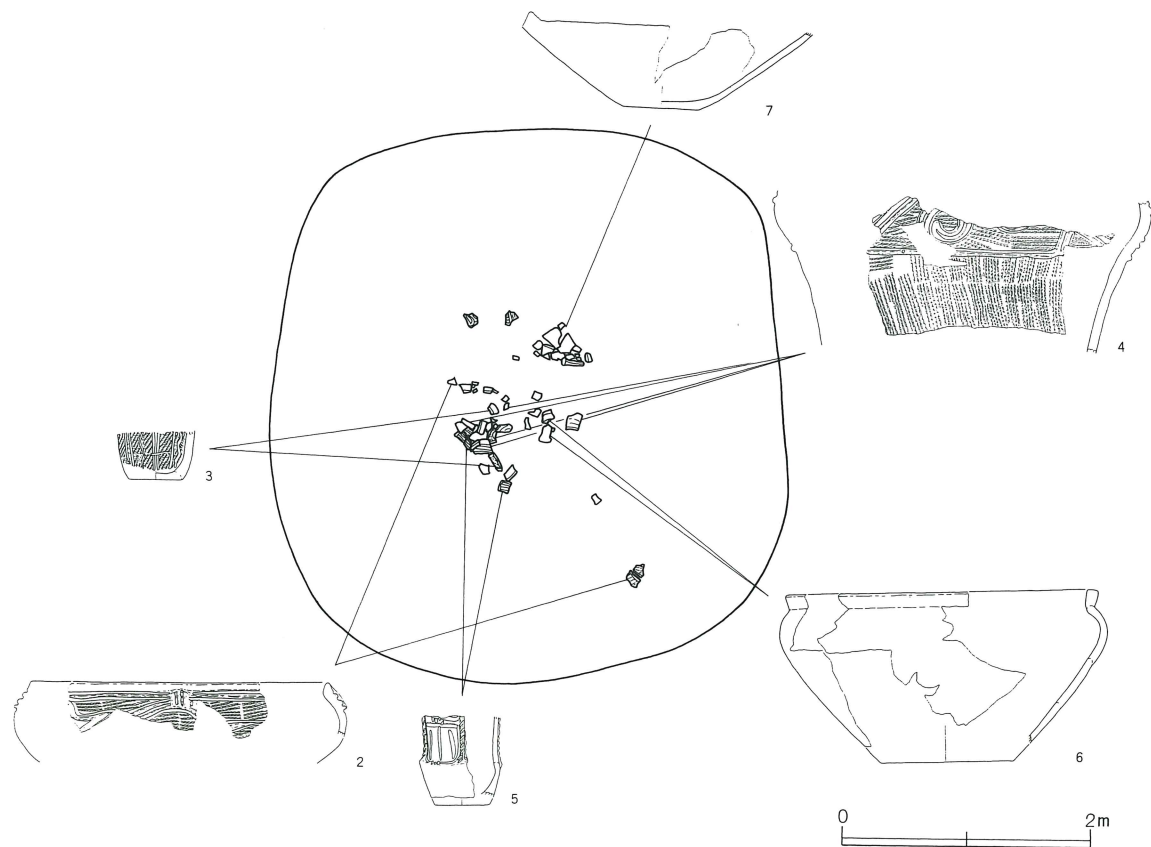
14は縦位の隆帯が密に貼りつけられるもので、隆帯間には棒状工具によるなぞりが加えられる。深鉢胴部中段のくびれの部分か、口縁に近い部分の破片であると思われる。15~18はキャリパー類深鉢の口縁部である。15は緩やかな波状口縁を成し、二本隆帯の渦巻モチーフが立体化して中空の突起となる。地文は縦位の捺糸文である。16は水平口縁で、横位に展開する隆帯モチーフとこれに直交する縦位の二本隆帯がみられる。地文は横位の捺糸文である。17は波状口縁で、櫛歯状工具による縦位の条線を地文に持つ。19~20は同様の深鉢の口縁部文様帯および頸部の破片である。20は筒形の胴部から球状に張り出す頸部へと連続する特

異な器形である。頸部無文帯は存在しない。地文は全面に縦位の捺糸文が施文される。21は口縁部から胴上半部までが残存する大破片である。頸部無文帯は存在せず、胴部と口縁部の境は1条の隆帯によって区画される。地文は区画から上が横位回転、区画から下が縦位回転の捺糸文である。

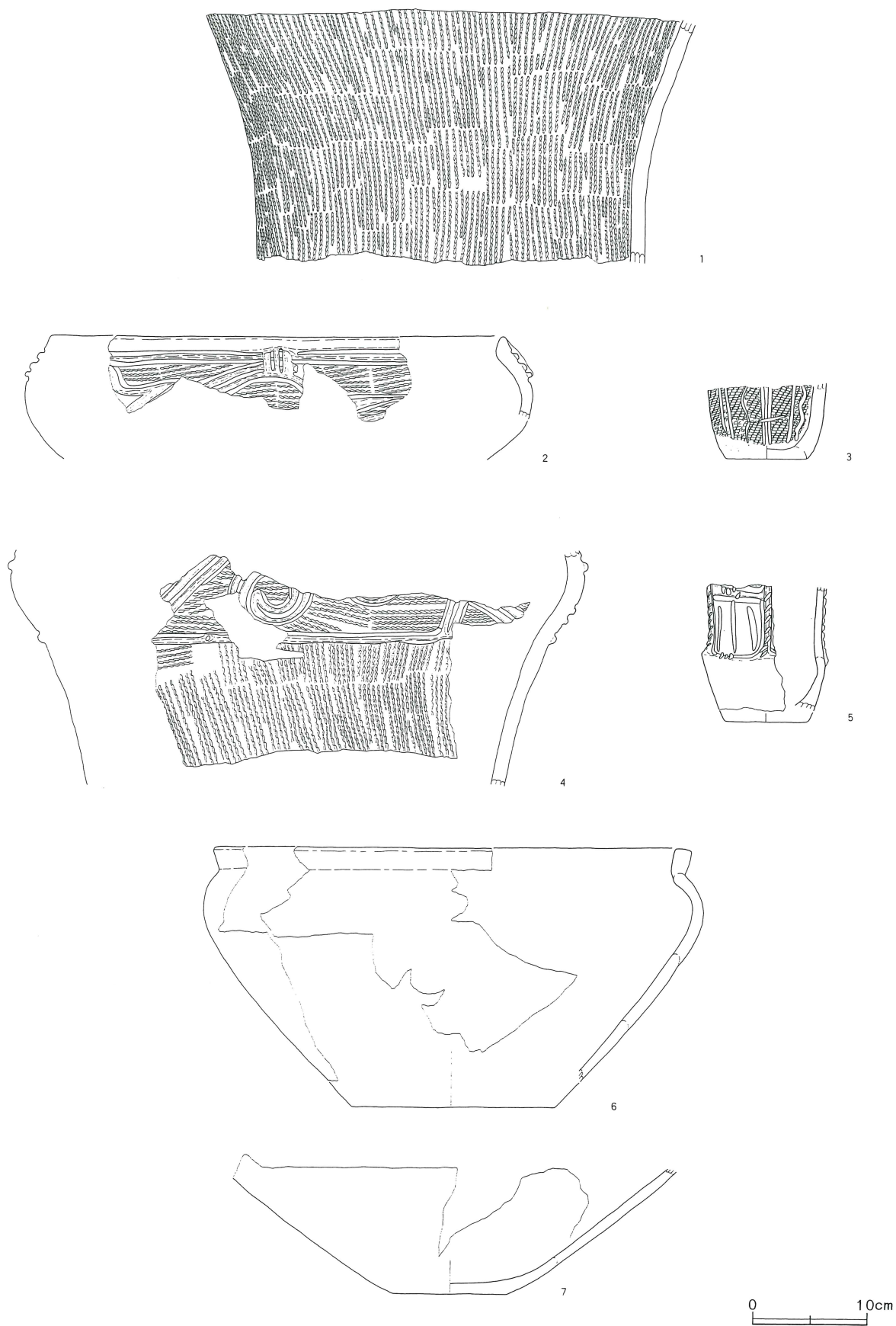
22・23は半裁竹管状工具による平行沈線文が施文される個体である。22は頸部と胴部の境を重畳する平行沈線によって区画するもので、頸部には波状の平行沈線が巡らされる。地文は縦位の捺糸文である。23は球状に張り出す胴下半部で、2条の平行沈線によりクラック状のモチーフが描かれる。地文はRL単節の縄文である。24は半裁竹管状工具による蛇行懸垂文と隆帯による懸垂文が共にみられる胴下半部である。25~28・35は地文のみ施文される破片である。

29~34は浅鉢である。29・30は無文浅鉢の外屈する口縁部、31・32は矩形の沈線文が描かれる胴上半部、33・34はドーム状に張り出す無文の胴上半部である。

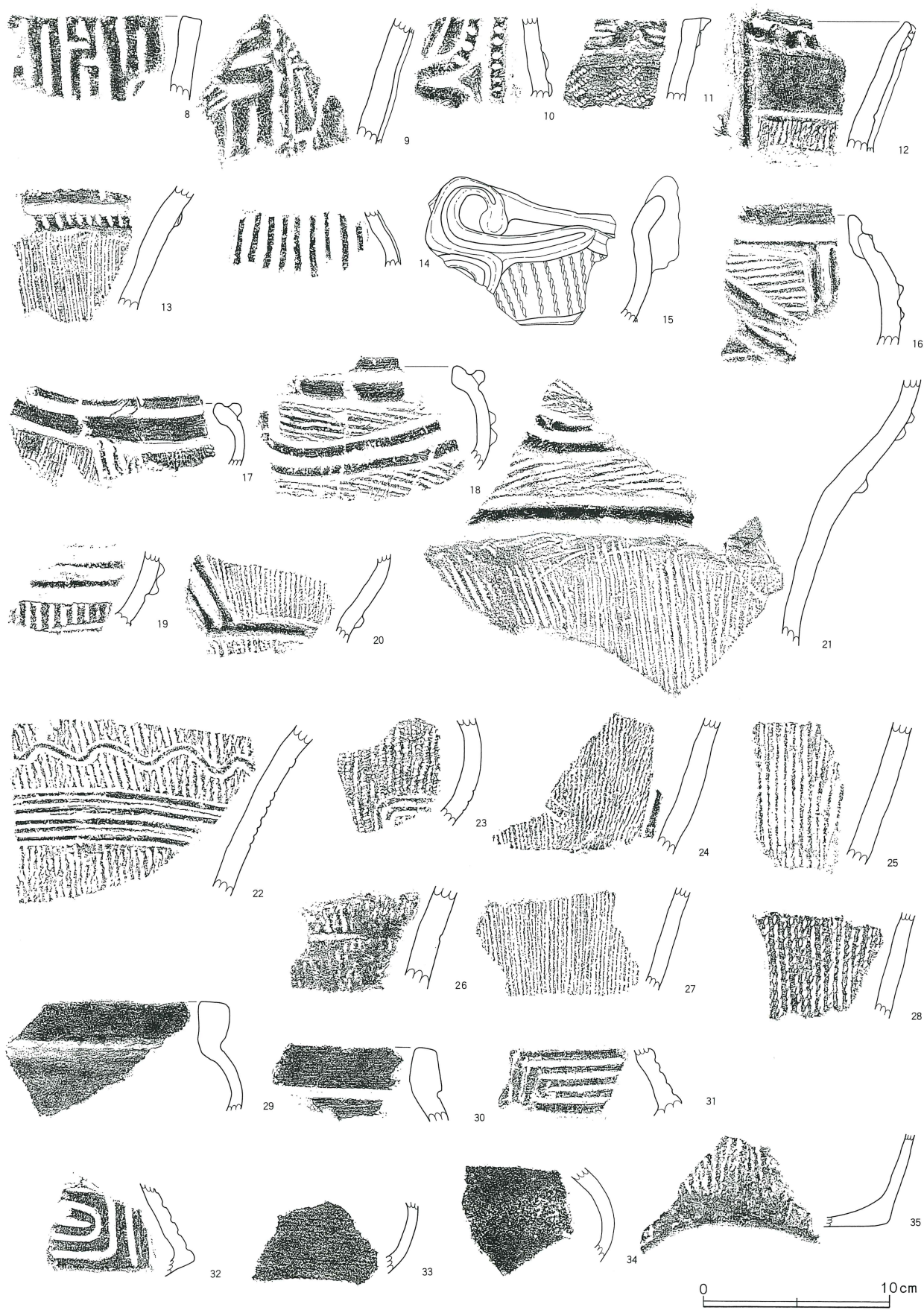
第309図 C区第2号住居跡遺物分布図



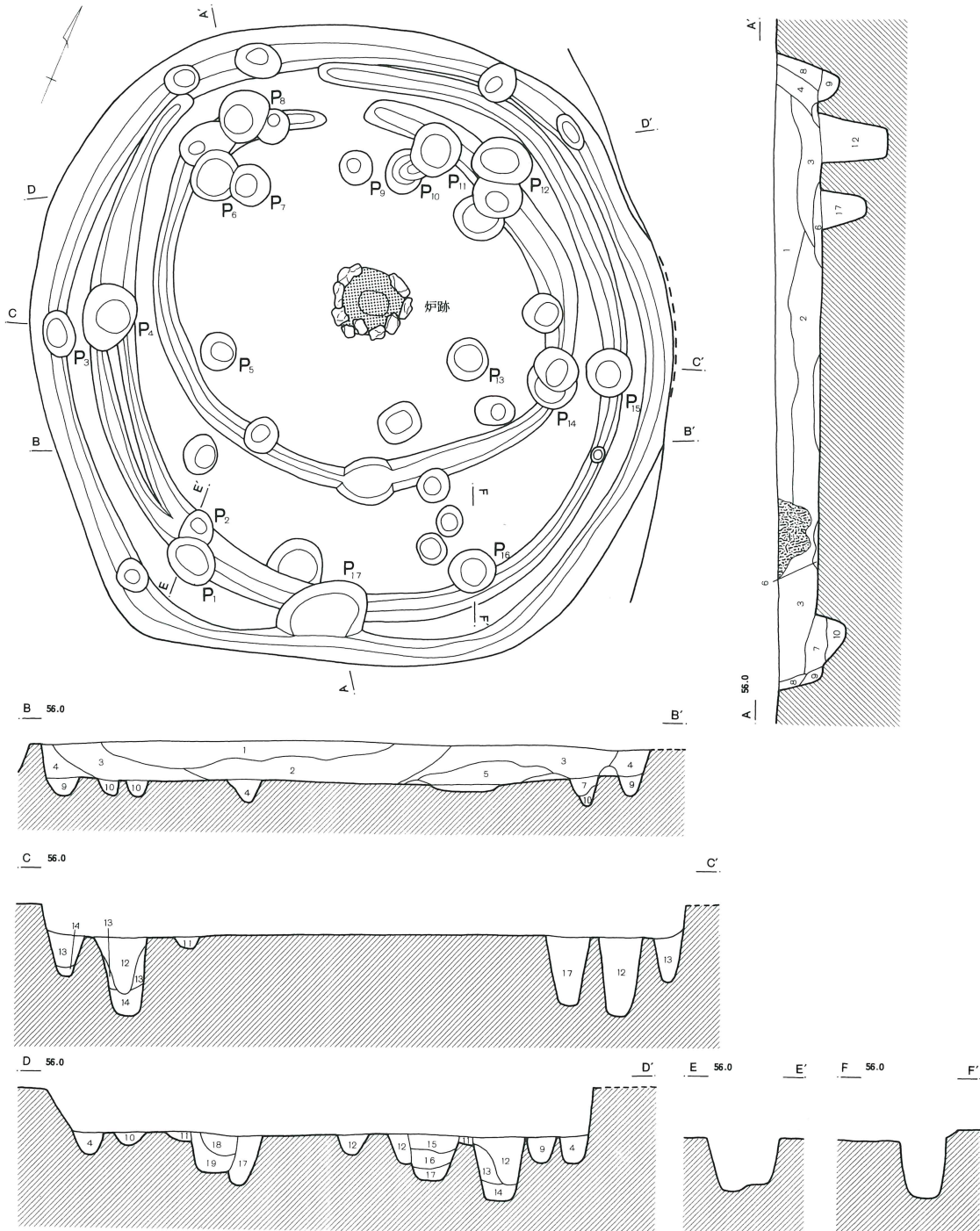
第310图 C区第2号住居跡出土土器(1)



第311图 C区第2号住居迹出土土器(2)



第312図 C区第3号住居跡

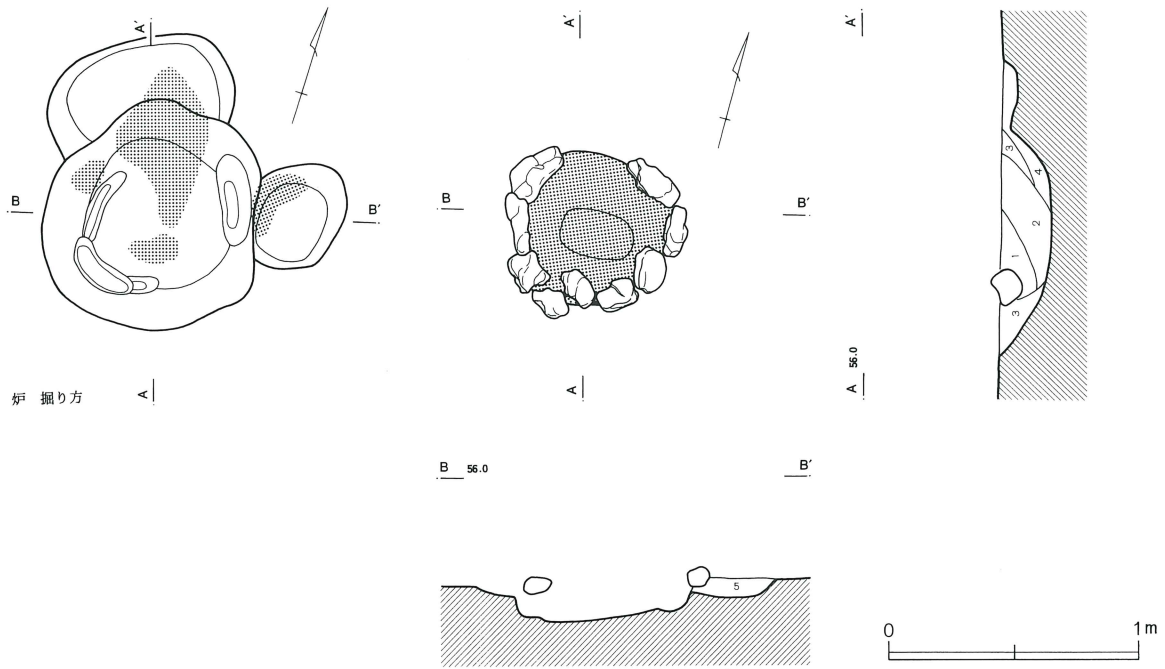


C区S J 3

- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1 暗褐色土 : ローム粒子極多量、焼土粒子・炭化物少量含む | 12 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量、炭化物少量含む 締まり良し |
| 2 黒褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量に含む | 13 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む |
| 3 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む | 14 灰黄褐色土 : 埋め戻しロームか 粘性に富む 締まり良し |
| 4 暗褐色土 : ローム粒子多量、ソフトローム少量含む | 15 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む 粘性に富む 締まり良し |
| 5 暗褐色土 : ローム粒子少量、炭化物微量含む 3層に比べて色調暗い | 16 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性あり、締まり良し |
| 6 暗褐色土 : ハードロームブロック多量に含む | 17 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く、ローム粒子多く含む 粘性強、締まり良し |
| 7 黒褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック・炭化物少量含む | 18 黄褐色土 : 埋め戻しローム 粘性に富む 固く締まっている |
| 8 褐色土 : ソフトローム・ローム粒子多量に含む | 19 暗褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性有り 締まり良し |
| 9 黄褐色土 : ソフトローム多量に含む | |
| 10 褐色土 : ソフトロームをブロック状に含む | |
| 11 黒褐色土 : ロームブロックを多く含む 粘性強、締まり強 | |

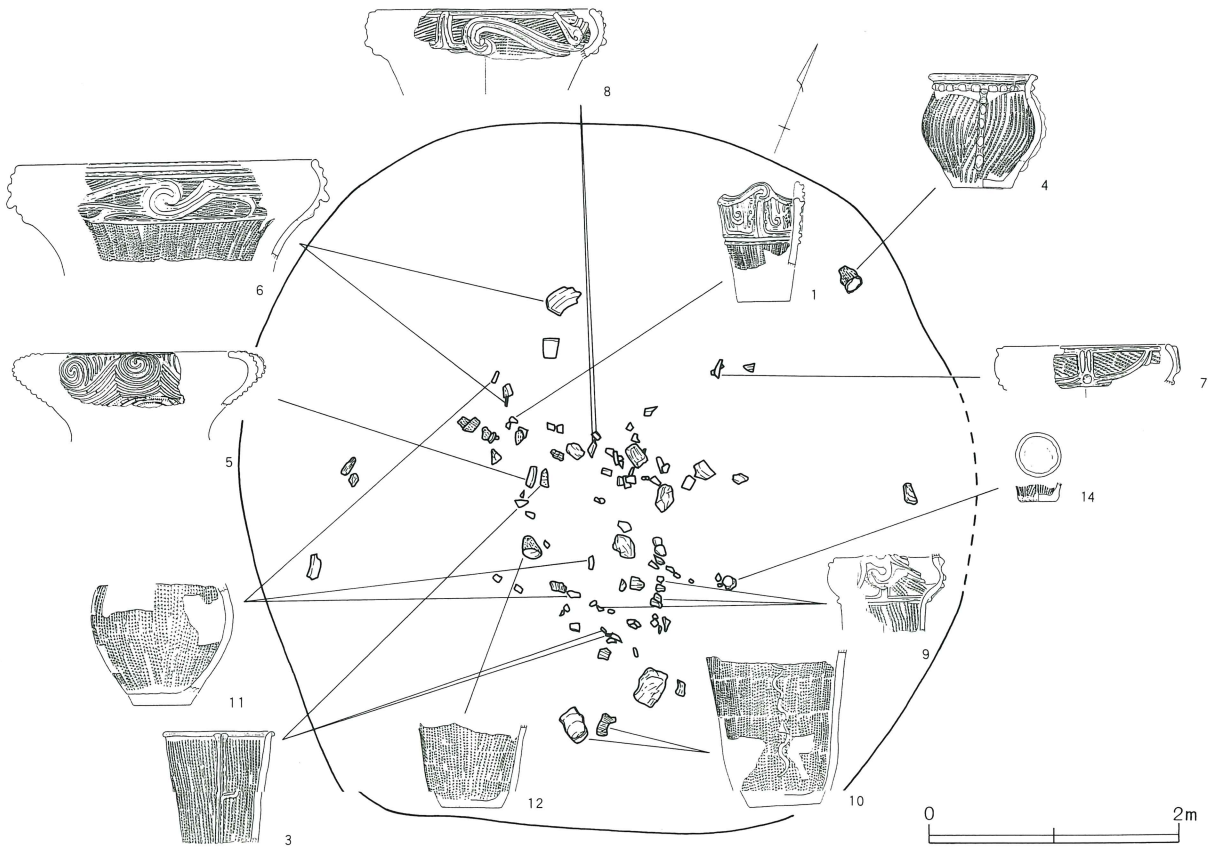
0 2m

第313図 C区第3号住居跡炉跡及び遺物分布図

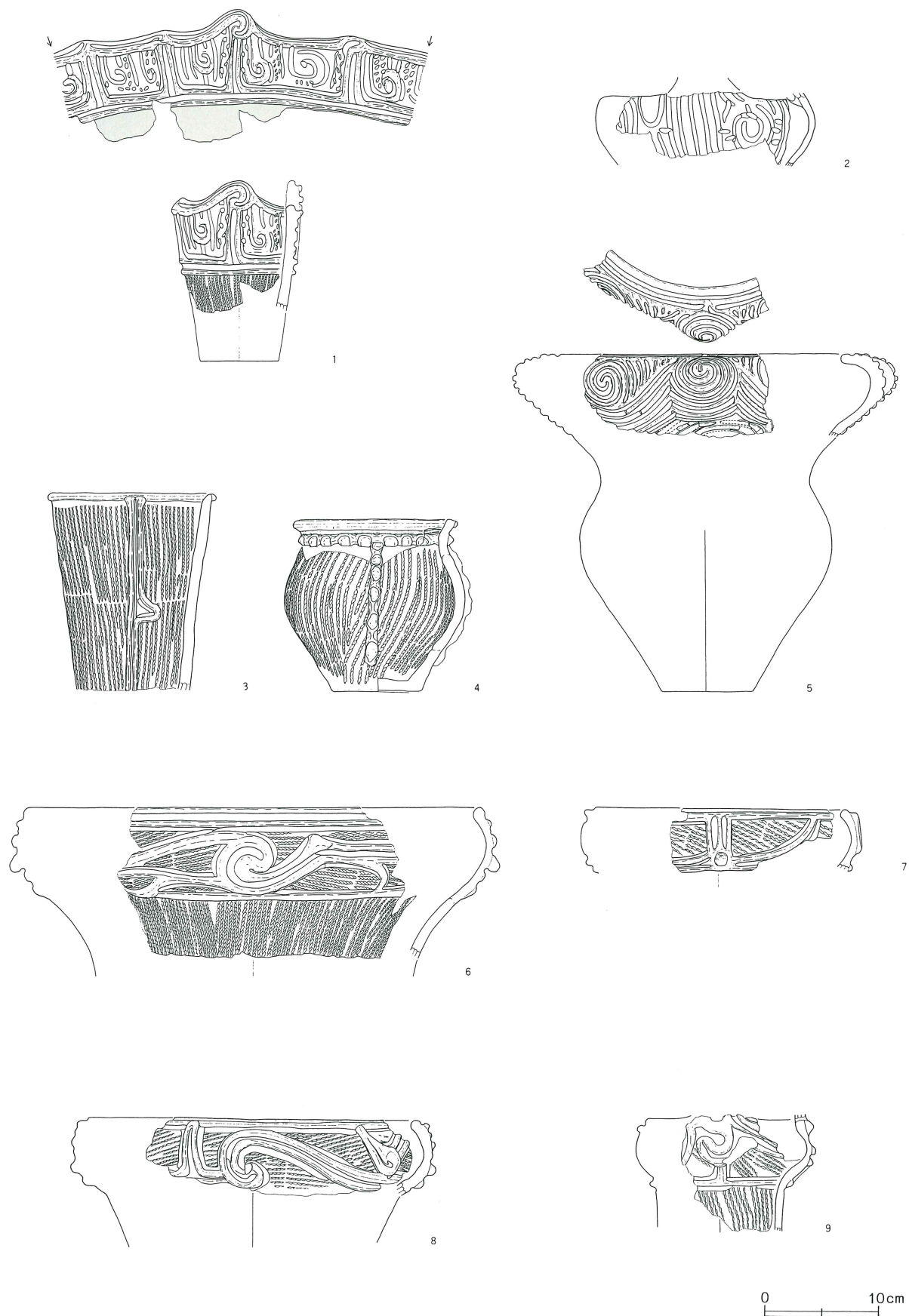


C区S J 3 炉跡

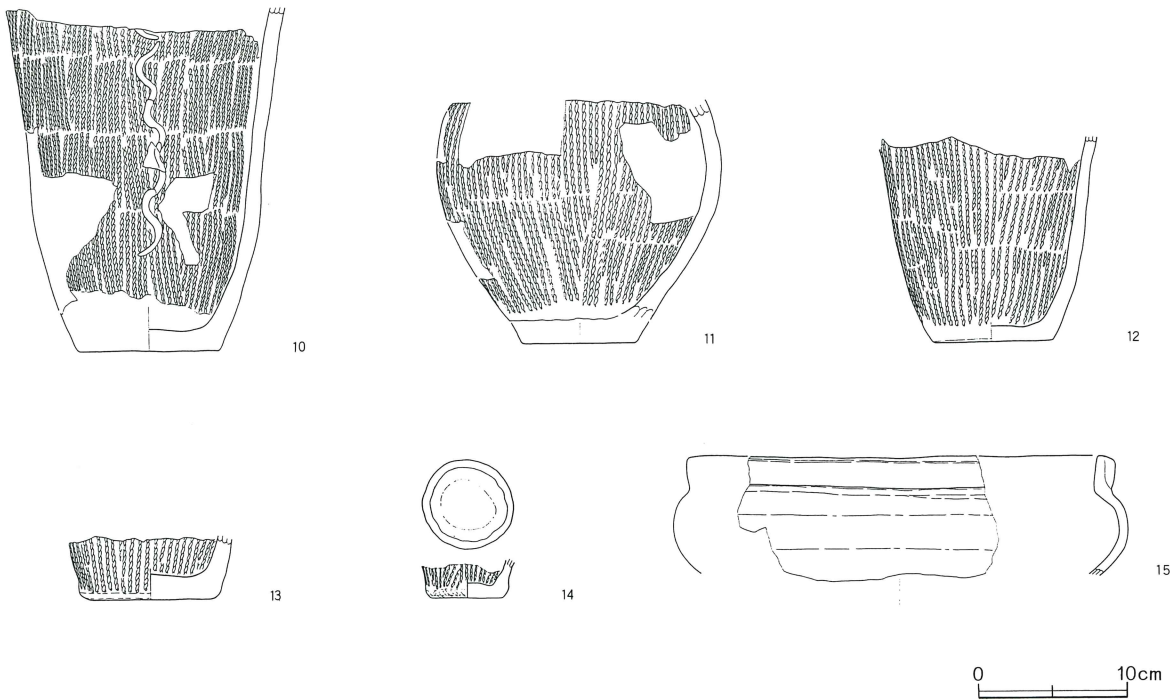
- | | |
|--|--|
| 1 黒褐色土 : ローム粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック少量含む 粘性有り 締まり良し | 4 灰黄褐色土 : ロームブロック・焼土ブロックやや多く含む 粘性欠く 固く締まっている |
| 2 黒褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロックやや多く含む 粘性欠く 締まり良し | 5 黒褐色土 : ロームブロック若干焼土ブロックやや多く含む 粘性欠く 固く締まっている |
| 3 黒褐色土 : ロームブロック極少量、焼土ブロック多く含む 粘性欠く 固く締まっている | |



第314图 C区第3号住居跡出土土器(1)



第315図 C区第3号住居跡出土土器（2）



C区第3号住居跡（第312図～第318図）

A-27・28区、V-27・28区に所在し、C区南端の住居跡群の一角を占めている。平面形は隅丸のほぼ正六角形で、径5.8～6mである。壁高は最も残りの良い部分で42cmであり、床面は平坦で、わずかに北へと傾斜する。床面上からは多数の柱穴が検出され、また壁溝は一部で重複するものを含めほぼ3巡する。したがって、本住居跡は最低3回の建て替えを経ているものと考えられる。主軸はN-20°-Wを指す。

建て替えが住居の拡幅を契機に行われたものと仮定して、最も古い段階の住居跡の平面形は、やや東西に長い不整楕円形で、長径3.8m×短径3.6mであり、P7・8・9など比較的浅い柱穴が壁溝に沿って巡る。壁溝は北端で切れるほかはほぼ全周する。壁溝の南端には南北42cm、東西50cmの膨らみがみられ、この部分が出入り口施設の痕跡であるとも考えられる。

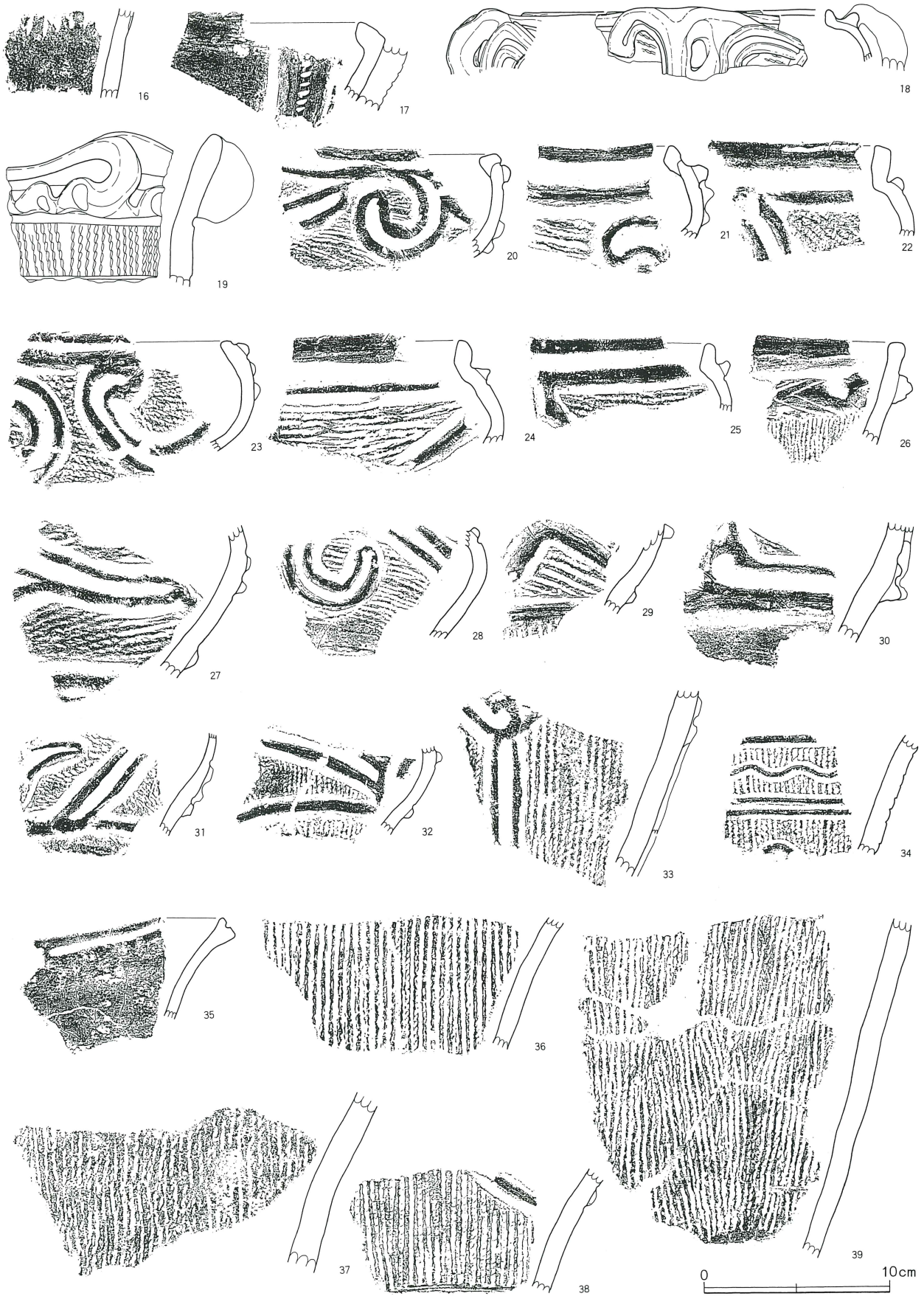
次段階の住居跡の平面形はやや南北に長い不整円形で、長径5.1m×短径4.9mである。P4・9・12などが本段階に属する柱穴であると思われるが、全体の配置は不明である。主軸線上南端壁際からやや西に寄って出入り口施設の痕跡と思われるピットが存在する。

壁溝は西辺で部分的に二重に巡っており、本段階がさらに1回の建て替えを伴っているか、部分的な設計変更が行われた可能性をうかがわせる。最終段階の住居跡は最も外周をなすもので、その規模と平面形は冒頭述べたとおりである。隅丸六角形の各コーナー付近に1基ずつの柱穴が配されるほか、壁溝内にも若干規模の小さい柱穴が散在する。壁高南端の立ち上がりに接して半月型のピットが存在し、これが出入り口施設の痕跡であると思われる。ピットの規模は東西80cm、南北50cm、深さ26cmで、住居跡中央に向かって傾斜する。

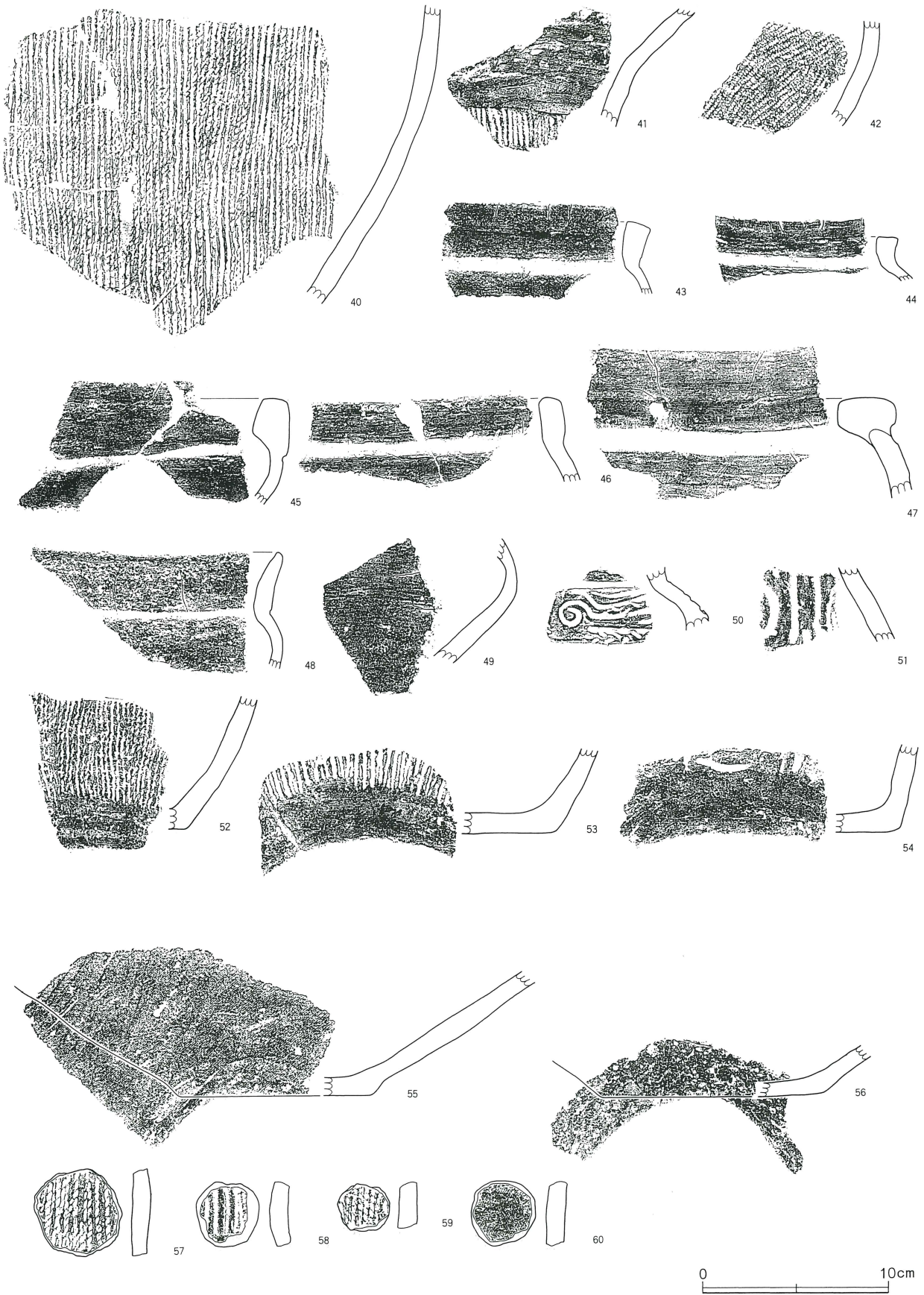
炉跡は床面中央若干北寄りに位置する。やや東西に長い円形の石囲炉で、北寄りの一角の石材を欠いている。この石囲炉の掘り方を完掘したところ、掘り方の北及び東で、より古い段階の炉の掘り方をそれぞれ検出した。直接の切り合い関係にないため、両者の新旧関係は明らかにできなかったが、各時期の壁溝との位置関係から北のものは最古段階、東のものが次段階の住居跡に伴うものとも想定しうるだろう。

本住居跡の覆土中からは縄文時代中期後半の土器及び石器が出土している。

第316图 C区第3号住居迹出土土器(3)



第317图 C区第3号住居迹出土土器(4)



出土土器（第314図～第318図）

1は円筒形の小型深鉢で、胴下半部を欠失する。4単位の波状口縁を成し、うち1単位が突出する。口唇直下には二本隆帯による入り組み文が巡らされる。胴部中段を横位の二本隆帯によって区画し、胴上半部には隆帯による窓枠状の区画が描かれる。区画内には隆帯+沈線によるJ字や交互刺突のモチーフが描き込まれる。胴下半部には縦位の撚糸文が施文される。

2は内湾する小型深鉢口縁部である。無文地に棒状工具による縦位の平行沈線や渦巻文が描かれる。口縁には大型の突起が1単位のみ付されるものと思われる。

3は円筒形深鉢で、胴下半部を欠失する。ほとんど直線的に立ち上がるコップ形の器形で、口端に1条の隆帯が巡る。この隆帯を起点として胴部に二本隆帯の懸垂文が1カ所のみ垂下し、胴部中段で棘刺状のモチーフを構成する。地文は縦位の撚糸文である。

4は短頸壺である。球胴状で頸部にくびれを有し、この部分に指頭押捺を伴う隆帯を巡らせる。また、口端外面にも隆帯が巡る。胴部は正対する2カ所に指頭圧痕を伴う隆帯が垂下する。

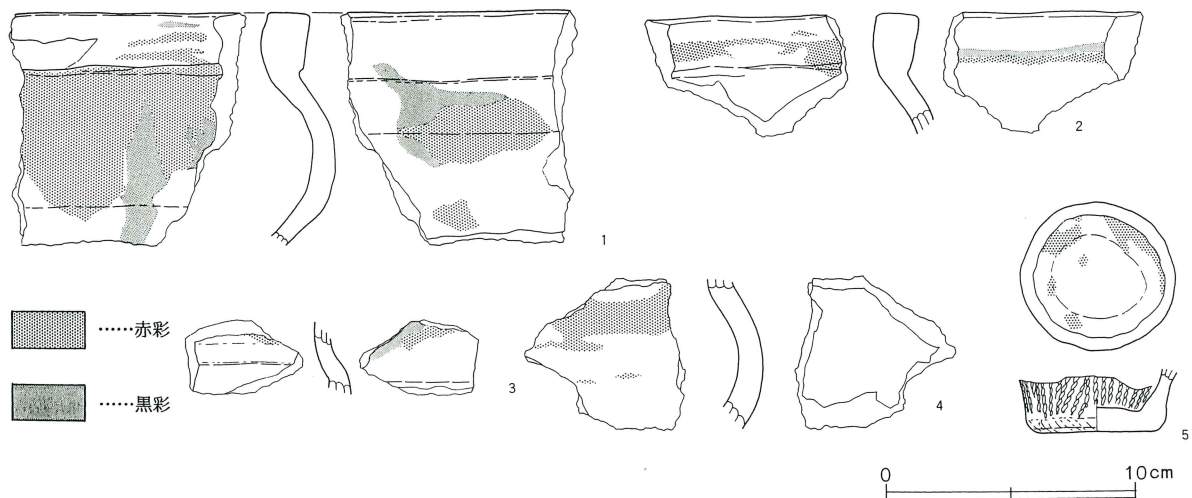
5は深鉢口縁部である。口縁が強く内屈するキャリパー形の器形で、四方に円錐形の突起が配される。この突起には渦巻文が描かれる。突起と突起の間は連弧状の区画によって連結され、この区画内部にも渦巻きのモチーフが描き込まれる。

6～8はキャリパー類深鉢の口縁部から頸部にかけての大破片である。二本隆帯による渦巻文や入り組み文、十字文などが横位に展開する。地文は撚糸文である。6は頸部にも縦位の撚糸文が施文され、頸部無文帯は存在しない。9はキャリパー類のイメージを踏襲する小型の深鉢であるが、円筒形の胴部に内湾する口縁を接続するもので、器形のうえでは明らかに別系統のものといえる。10～14は地文のみの胴下半部から底部である。11が球胴状となる以外は全て円筒形を呈する。地文は全て縦位の撚糸文である。

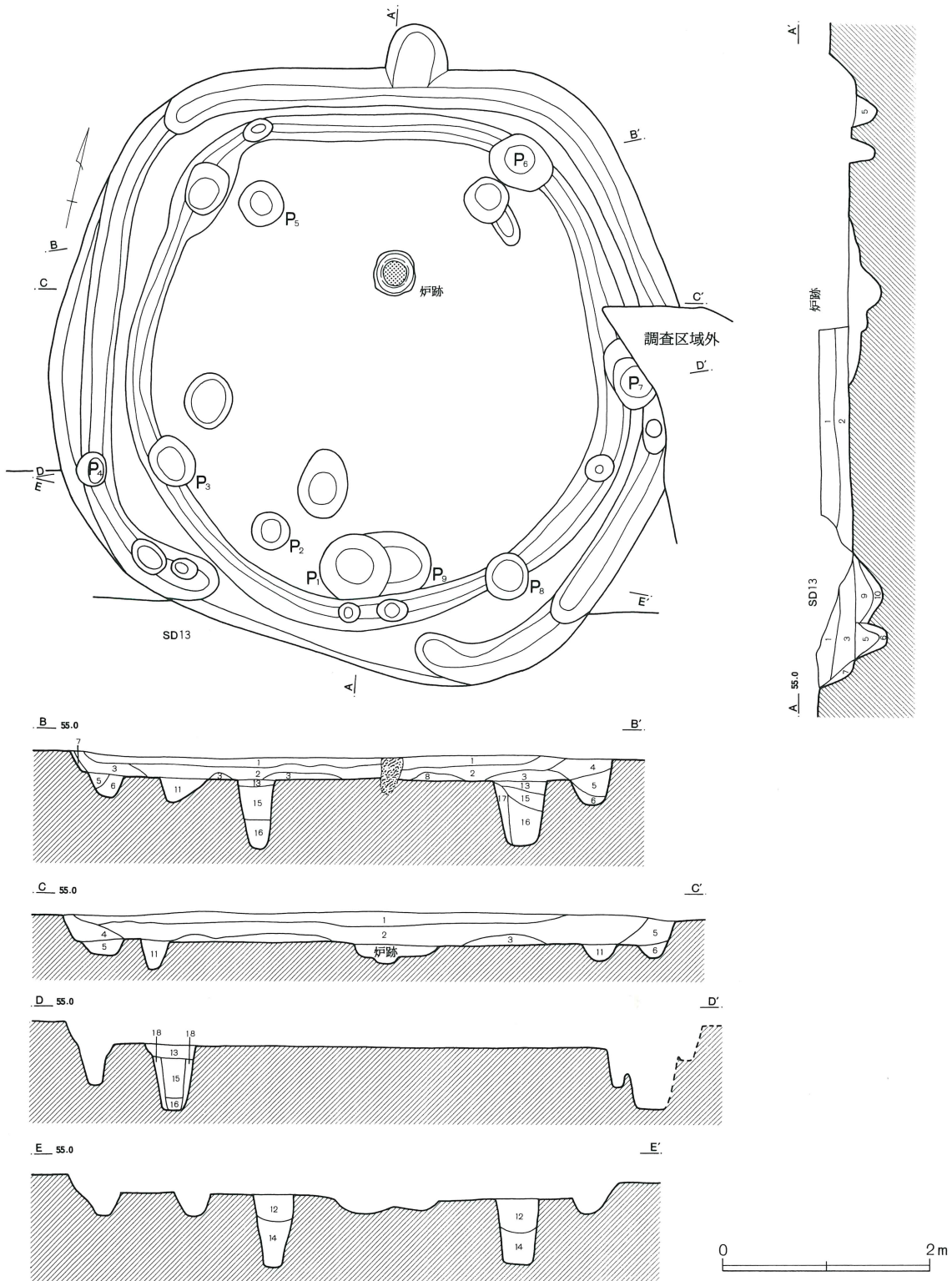
16は阿玉台式である。17は勝坂系の深鉢口縁部で、口端L字形に屈曲する。18は内屈する深鉢口縁部で、X字形の中空把手が付される。19は円筒形の深鉢口縁部で、交互刺突を伴う隆帯が巡る。20～32はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。二本隆帯の横S字文・入り組み文が特徴的にみられる。33は同種の深鉢の胴部で、二本隆帯のY字懸垂文が垂下する。34は竹管文のみられる胴部である。36～42は地文のみの胴部を一括した。43～49は口縁外屈する浅鉢である。50・51は胴部中段がくの字に張り出す浅鉢で、同上半部の文様帯である。52～56は底部の破片を一括した。55・56が浅鉢、それ以外は深鉢底部である。57～60は土製円盤である。

本住居跡出土の土器片には塗彩のみられるものが目立つ。第318図に代表的なものを呈示した。

第318図 C区第3号住居跡出土土器（5）



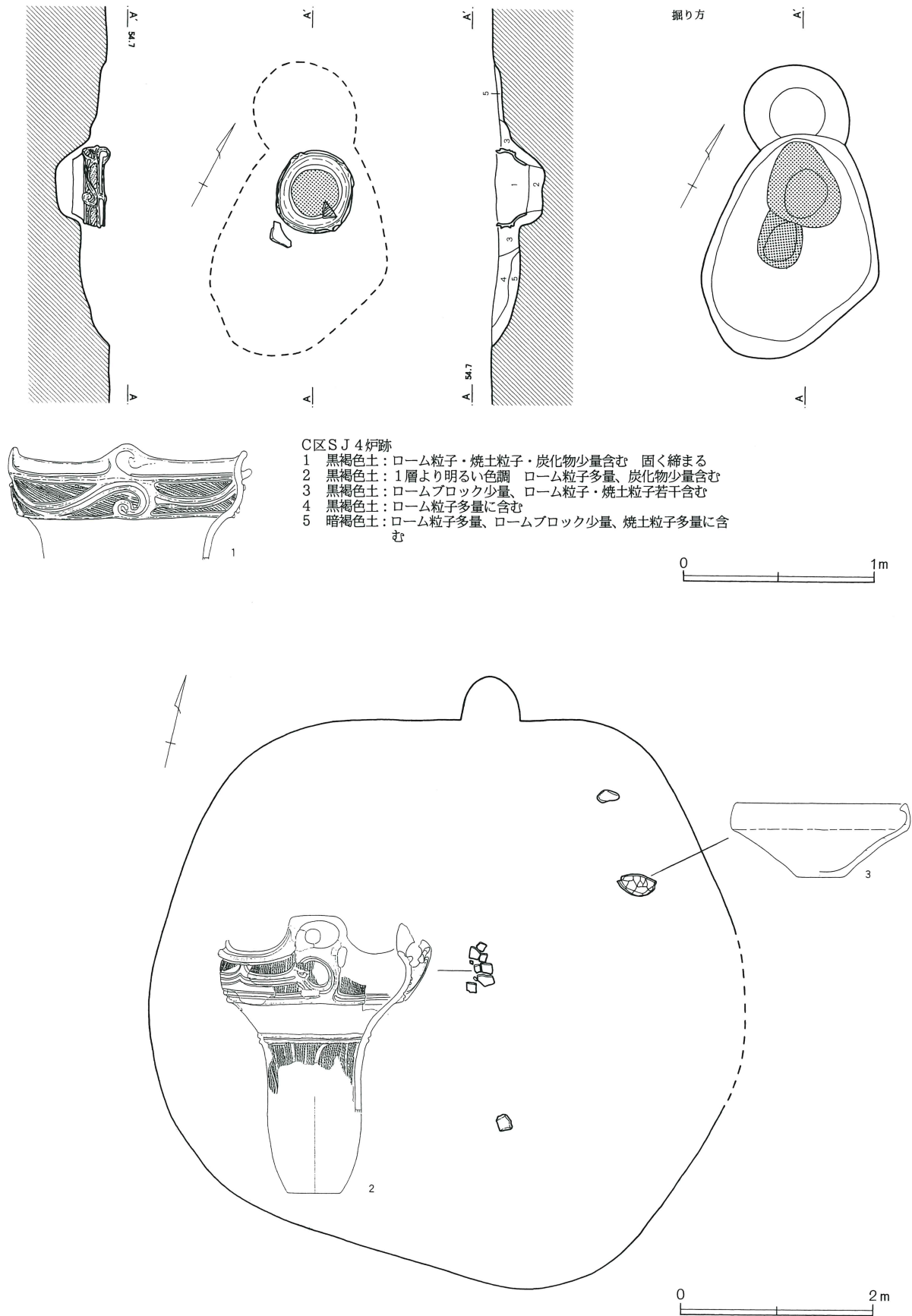
第319図 C区第4号住居跡



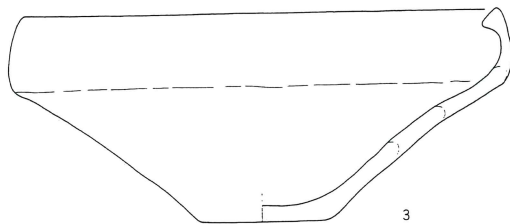
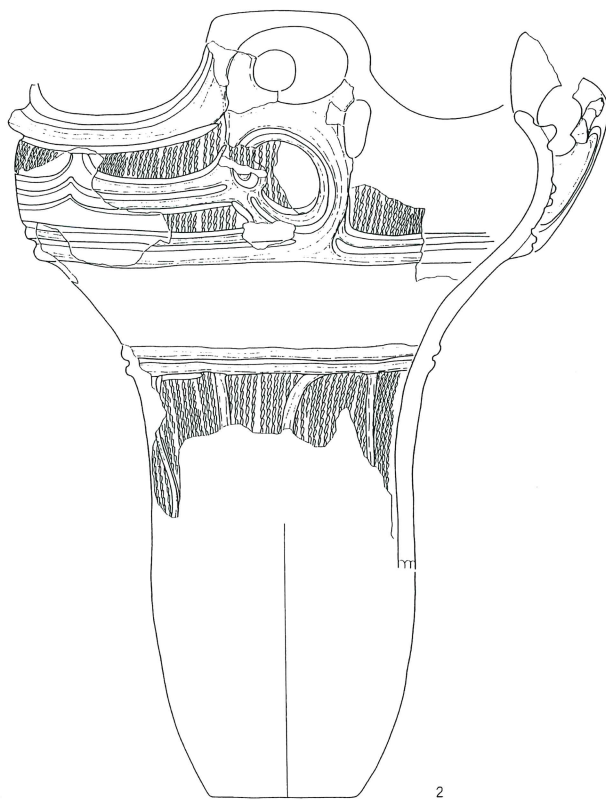
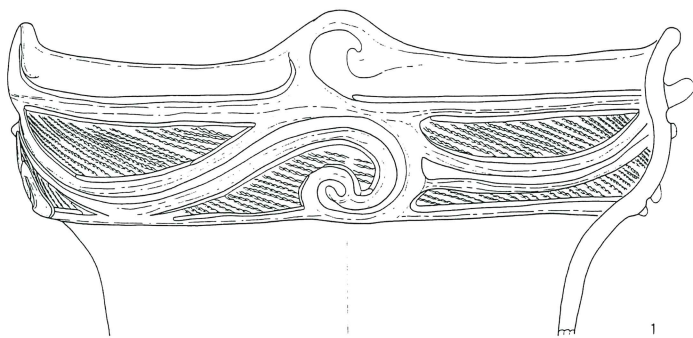
C区S J 4

- | | |
|--|--|
| <p>1 黒褐色土：ローム粒子多量、炭化物少量含む 粘性なし、締まりなし</p> <p>2 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量、炭化物少量含む
粘性なし、締まりあり</p> <p>3 暗褐色土：炭化物若干含む</p> <p>4 暗褐色土：ローム粒子・ソフトローム多量に含む</p> <p>5 茶褐色土：ローム粒子多量に含む 黄褐色土を斑に含む</p> <p>6 暗褐色土：ローム粒子多量に含む</p> <p>7 褐色土：ロームブロックを多量に含む</p> <p>9 暗褐色土：ローム粒子・ソフトローム・炭化物少量含む</p> <p>10 暗褐色土：ローム粒子多量、炭化物少量含む</p> | <p>11 暗褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物少量含む</p> <p>12 黒褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量含む 締まりあり</p> <p>13 暗褐色土：ロームブロック少量、ローム粒子多量、炭化物微量含む
締まりあり</p> <p>14 暗褐色土：ローム粒子多量含む</p> <p>15 暗褐色土：ローム粒子多量、炭化物少量含む</p> <p>16 暗褐色土：ローム粒子少量含む 締まりなし</p> <p>17 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒子少量含む</p> <p>18 褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む</p> |
|--|--|

第320図 C区第4号住居跡炉跡

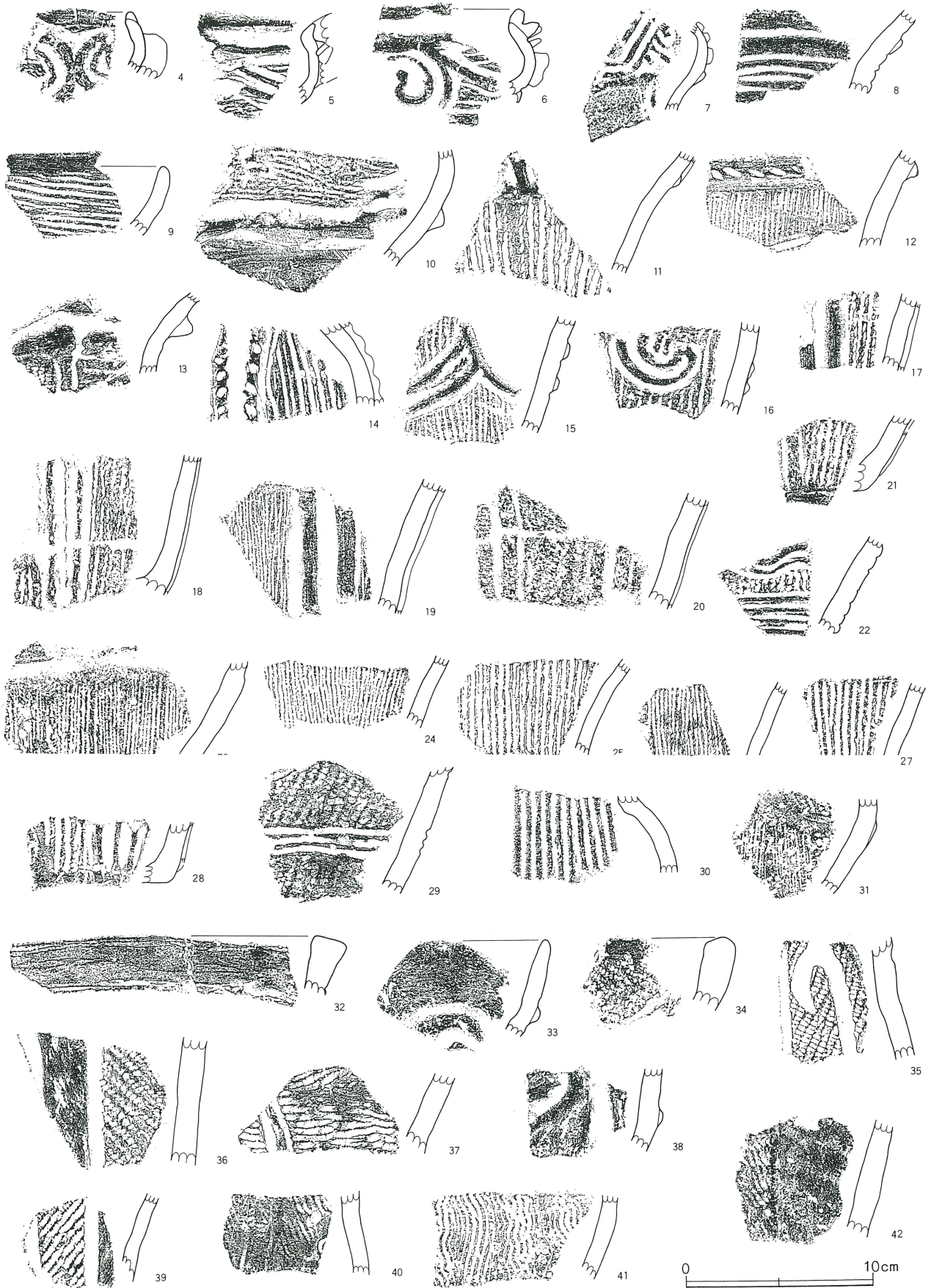


第321图 C区第4号住居跡出土土器(1)



0 10cm

第322图 C区第4号住居迹出土土器(2)



C区第4号住居跡（第319図～第322図）

V-27区に所在する。第3号住居跡の西に隣接し、覆土南半を第13号溝に切られる。平面形は東西に長い不整五角形であり、規模は長径6.2m、短径5.5mである。壁高は最も残りの良い部分で36cmである。床面はほぼ平坦で、住居跡中央部から南壁にかけては若干南に傾斜する。

本住居跡の壁高は南壁の一部を除いてほぼ二重に巡っており、住居の拡張が行われたことをうかがわせる。旧段階の住居跡に属すると思われる内周の壁溝は頂点の一つを南に向けた隅丸の五角形で、長径約5m、短径約4.8mである。外周の壁溝は南壁部分で約2mにわたって切れており、この部分は旧住居跡と壁を共有している可能性もある。また、西壁部分では住居跡の壁を離れてほぼ南北一直線に走っている。

柱穴は新旧の壁溝のコーナー部分を中心として多数発見されている。これらのうちP7・8は旧段階、他はほとんどが新段階の住居跡に属すると思われる。住居跡のプランがやや不整形であるため、支柱穴配置は明らかにし得ないが、新段階については変則的な6本支柱を構成する可能性が高い。

内周の壁溝の南端内側に接して掘鉢形のピットが検出されており、出入り口施設に相当するものと思われる。また、北壁のほぼ中央に、ほぼ床面と同じ深さの小張り出しが存在している。これが住居跡に伴うものであるかどうかは土層断面からは明らかにし得なかったが、住居跡の主軸線上に位置しており、前述の出入り口ピットと炉跡をはさんで対局にあることから、このピットが上屋構造の一部として何らかの機能を担っていた可能性がある。

主軸線上奥壁寄り約1/3の地点に埋甕炉が位置している。この炉跡の掘り方を完掘したところ、埋甕炉に伴う炉床の南に若干ずれて、より古い炉床が検出された。これは拡張前の住居跡に伴うものであろう。

本住居跡からは縄文時代中期後半の土器群を主体として、中期終末の土器群少量が混じる。後者は後世の第13号溝掘削に際して覆土中に紛れ込んだものである

う。

出土土器（第321図・第322図）

1は炉体土器である。キャリパー類の深鉢で、頸部から下を欠失する。4単位の小波状口縁で、波頂部には隆帯+沈線の渦巻文が配される。口縁部文様帯は上下を隆帯により区画し、二本隆帯による横S字モチーフが描かれる。地文は横位の撚糸文で、頸部には無文帯が存在する。口径40cm、現存高19.8cmを測る。

2は床面ほぼ中央部の覆土下層から出土したもので、キャリパー類の深鉢である。胴部中段から下と、口縁部の大半を欠失する。4単位の大波状口縁で、波頂部には中央に貫通孔を持つ台形の突起が配される。口縁部文様帯には二本隆帯による大型の渦巻文が展開し、前述の突起と融合して中空の大型把手を構成する。

頸部には無文帯が存在し、胴部との境は2本一組の隆帯によって区画される。胴部には二本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はすべて縦位の撚糸文である。口径推定30cm、現存高32.4cmを測る。

3は無文の浅鉢である。器外面にわずかに赤色顔料の残存がみられる。口径29cm、器高12.2cmを測る。

4～6はキャリパー類深鉢の口縁部である。二本隆帯の渦巻文や横S字文が横位に展開する。

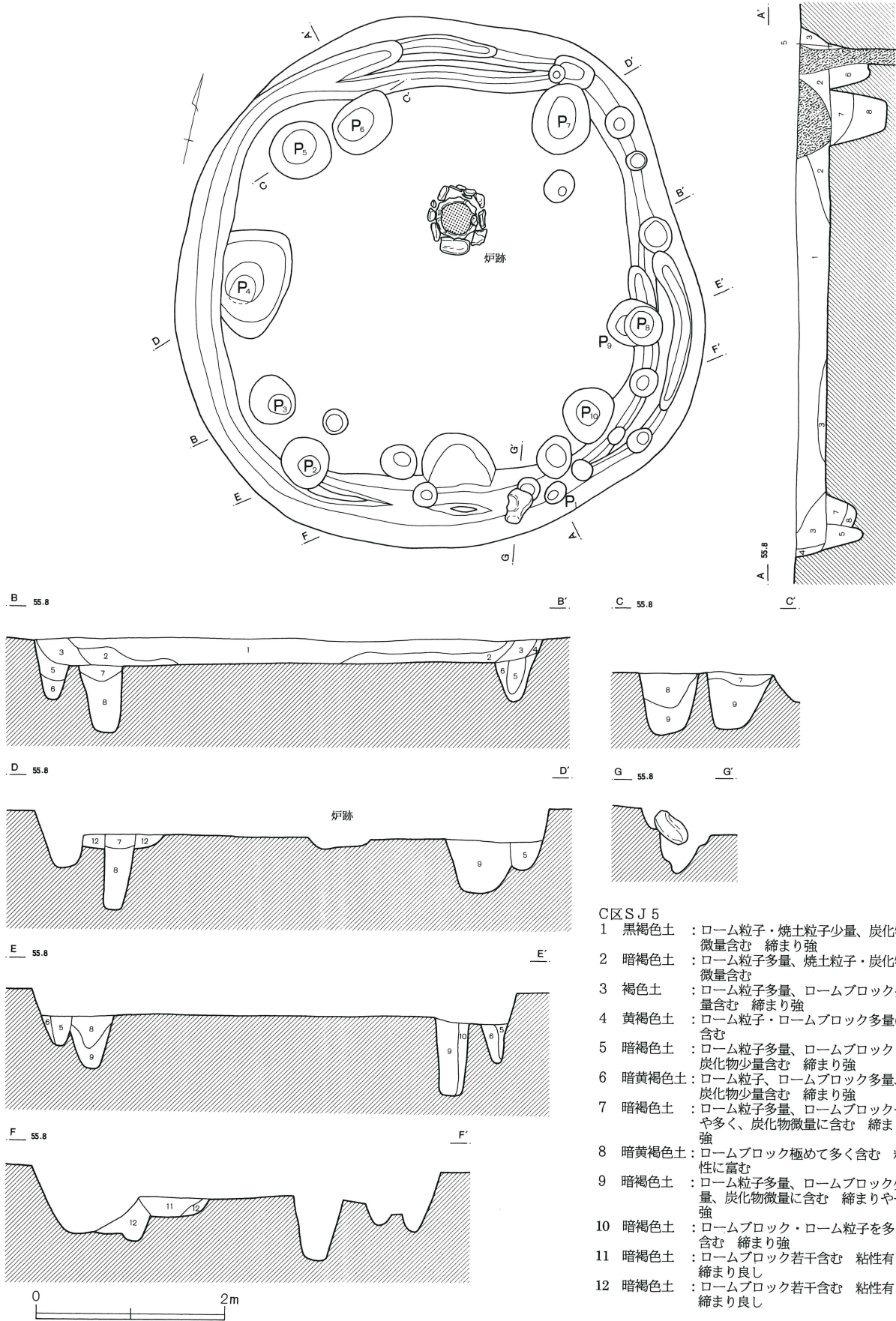
7・10は口縁部から頸部にかけての破片で、頸部に無文帯が存在する。8は頸部と胴部との境をなす横位の隆帯区画である。

11は縦位の撚糸文が施文される頸部で、口縁部文様帯の下端を区画する隆帯がみられる。12は斜位の刻みを伴う隆帯が巡る。

14は刻みを伴う隆帯が2本平行して垂下する。地文は棒状工具による集合沈線である。15・16は二本隆帯によるJ地文が描かれる胴部である。17～21は隆帯による懸垂文が垂下する胴部である。23～27は地文のみの胴部破片である。29は連弧文系の深鉢胴部、30は球胴状に張り出す深鉢胴下半部で、縦位の集合沈線が施文される。32は外屈する浅鉢口縁部である。

33以下は時期のより新しい中期後葉から末葉の破片で、覆土中への混入と考えられるものである。

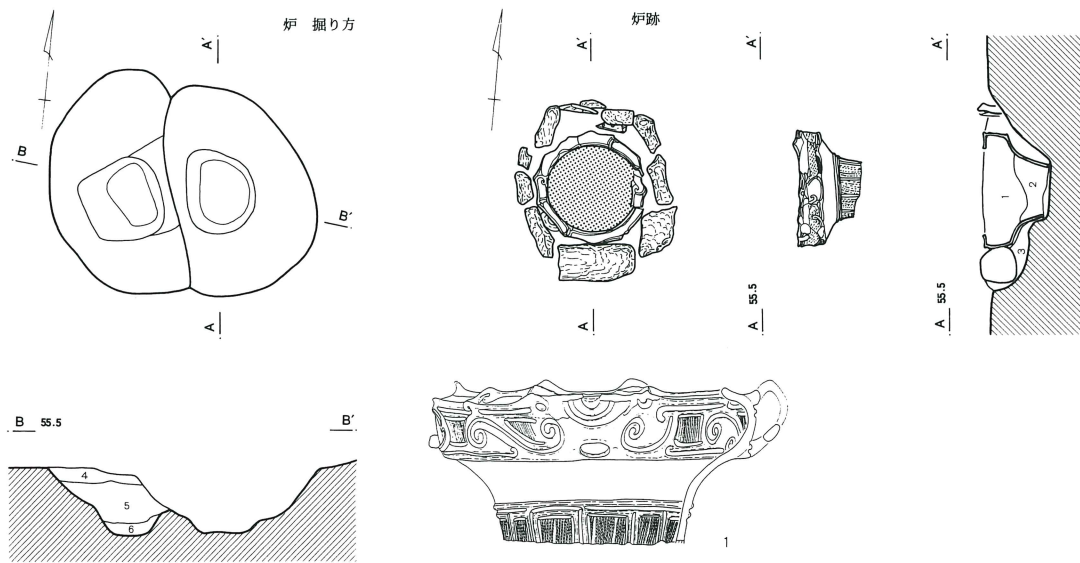
第323図 C区第5号住居跡



C区SJ5

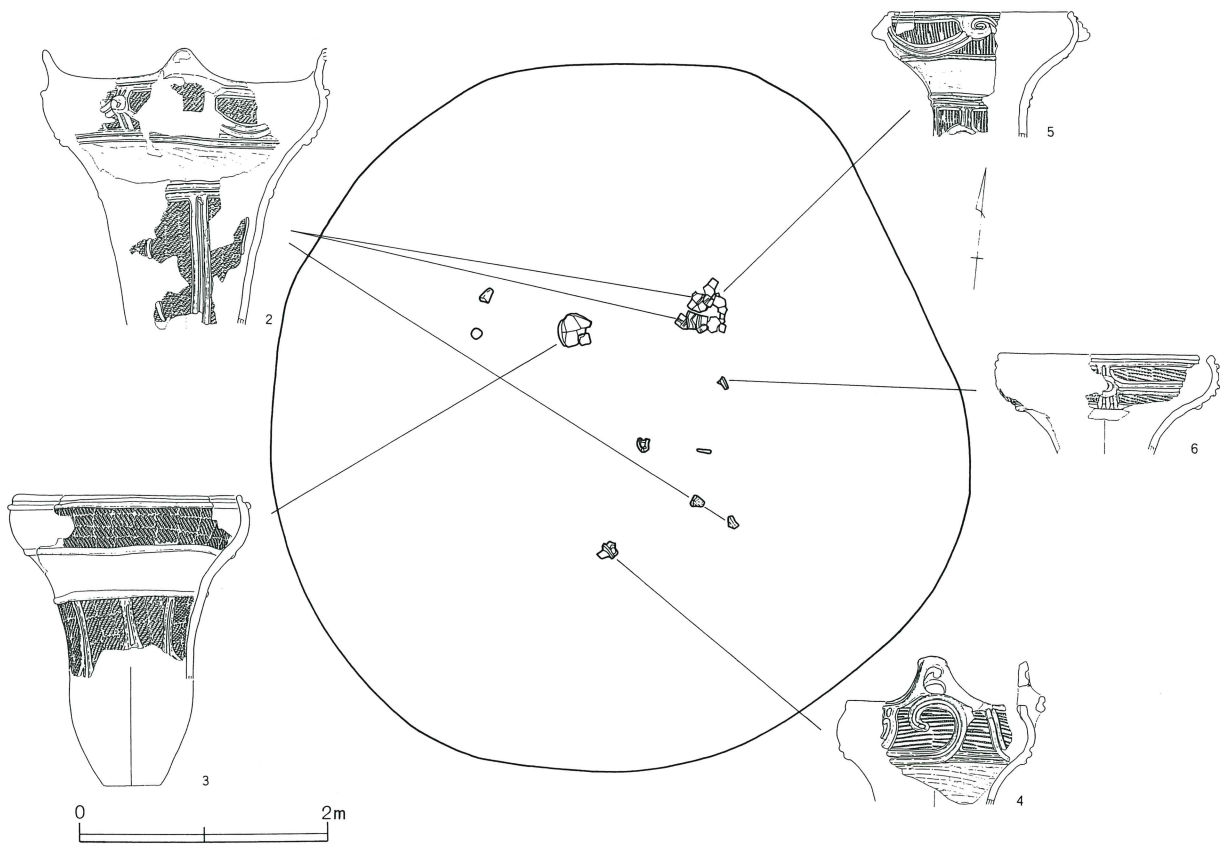
- 1 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量含む
- 3 褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック少量含む 締まり強
- 4 黄褐色土 : ローム粒子・ロームブロック多量に含む
- 5 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック・炭化物少量含む 締まり強
- 6 暗黄褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量、炭化物少量含む 締まり強
- 7 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロックやや多く、炭化物微量に含む 締まり強
- 8 暗黄褐色土 : ロームブロック極めて多く含む 粘性に富む
- 9 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック少量、炭化物微量に含む 締まりやや強
- 10 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子を多く含む 締まり強
- 11 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性有り 締まり良し
- 12 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性有り 締まり良し

第324図 C区第5号住居跡炉跡及び遺物分布図



C区S J 5 炉跡

- 1 暗茶褐色土：ロームブロック若干、焼土ブロック少量含む 粘性有り 締まりよし
- 2 暗茶褐色土：ロームブロックやや多く、ローム粒子・焼土ブロック・炭化物若干含む
- 3 暗黄褐色土：ロームブロック・焼土ブロック少量含む 粘性有り 固く締まっている
- 4 暗褐色土：ロームブロックやや多く含む 粘性有り 固く締まっている
- 5 暗茶褐色土：ロームブロック・焼土ブロック若干含む 粘性有り 締まりよし
- 6 暗黄褐色土：ロームブロック若干、焼土ブロックやや多く含む 粘性 欠く 締まりよし



C区第5号住居跡（第323図～第327図）

T-31区に所在する。C区住居跡群中もっとも北に位置し、背後に小畦川の段丘斜面を控えている。南に向かって開いた不整円形を呈し、直径約5.5mを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。壁高は残りの良い部分で35cmを測る。

床面は平坦で、北東から南西に向かって緩やかな傾斜を示す。壁溝は西壁を除いて部分的な重複を示す。規模的には大差ないが、内周のものは4.8mの隅丸方形を呈する。

炉跡は主軸線上奥壁寄りに位置している。炉体土器の周囲に炉石を巡らせた石囲埋甕炉である。炉体土器は深鉢の胴下半部及び口縁の把手を欠いたものを正位に埋設する。石囲部全体のプランは隅丸長方形を呈し、長径73cm、短径62cmを測る。炉床面までの深さは28cmを測る。炉体土器はこの炉床面に底を接する状態で埋設されていた。南縁の炉石には他の三辺より大型の礫が用いられている。炉の掘り方は長径80cm、短径60cmの楕円形を呈し、中央部に炉体土器埋設のための2段の掘り込みを持っている。

炉跡の掘り方を掘削する過程で、前述の炉跡の西に接してより古い段階の炉跡の掘り方を検出した。掘り方の平面形及び深さは新段階のそれとほとんど変わらない。2段の掘り込みを持つ点も同様で、こちらにも土器が埋設されていた可能性がある。

柱穴とみられるピットは11本が検出されている。内周側の壁溝の4隅と、東辺・西辺の中央に対応してそれぞれ1～2本づつが検出された。3組の支柱穴が主軸線をはさんで対峙する。6本柱の構成が新・旧段階を通じて維持されたものであろう。深さは55～80cmを測る。

主軸線上南端、内周の壁溝に半ば掛かった状態で、ごく浅い皿状のピットが検出された。これは出入口に関わる何らかの施設の痕跡であると考えられる。壁溝からの奥行きは55cm、幅70cm、深さ20cmを測る。西壁中央の支柱穴P4の周囲からもこれに類似の落ち込みが検出されている。土層断面上ではこのピットがP4

に切られるかたちで、旧段階の住居跡に伴うものである可能性が高いが、これが住居出入口の付け替えを意味するものかは確証がない。

前述「出入口ピット」より50cm程東の壁溝上に、長径50cm余りの河原石1点が出土している。礫は壁高の外側立ち上がり身を持たせ掛けるように、壁溝埋土に半ば落ち込んだ状態で出土している。この礫も、出入口に絡む何らかの構造の一部であろう。

このほか、覆土中からは縄文時代中期後葉の土器が出土している。

出土土器（第325図～第327図）

1は炉体土器である。コの字形に内屈するやや特殊な器形で、口縁部文様帯は口唇直下の垂直に立ち上がる部分に位置している。二本隆帯による横S字モチーフが横位に展開し、隣合うモチーフの末端どうしが融合して突出し、4単位の中空把手を構成するが、これらは炉体として転用される際にすべて取り除かれており、原形をとどめていない。

頸部には無文帯が存在する。胴部には二本隆帯による懸垂文が垂下する。地文は口縁部においては櫛歯状工具による縦位の条線、胴部においては縦位の捺糸文が施文される。口径34cm、最大径42cm、現存高20.2cmを測る。

2～6の復元個体はいずれもキャリパー類の深鉢である。

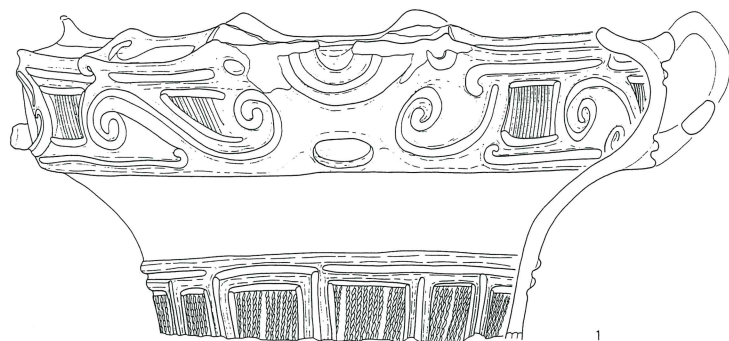
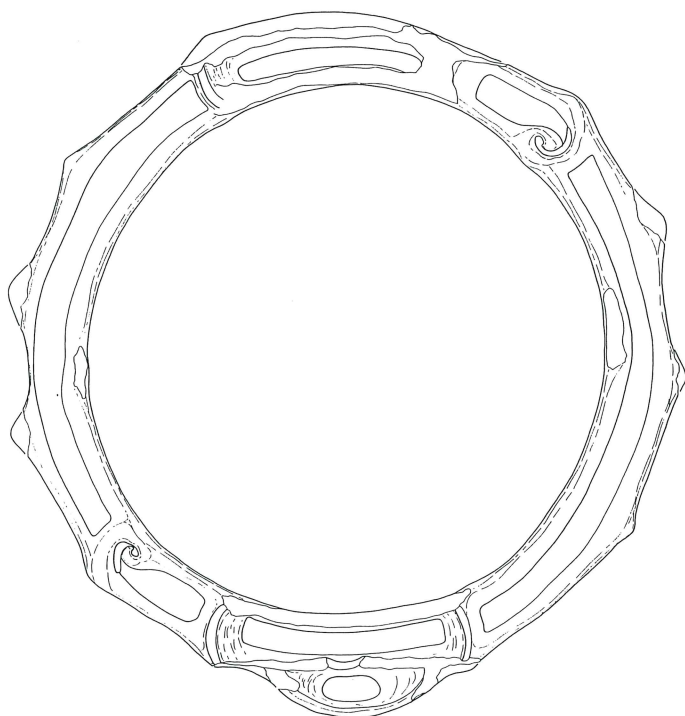
2は口縁から胴下半部にかけて全体の1/4周程度が残存している。4単位の大波状口縁を呈するものとみられる。口縁部には二本隆帯による繫弧状のモチーフが描かれ、繫弧の接点には上向きに突出した小渦巻きが配される。モチーフの一部が前述の波状口縁の波頂部と融合して立体の把手を構成するものとみられるが、この部分は剥落して失われている。

頸部には無文帯が存在する。胴部には二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。

地文はRL単節の縄文で、すべて縦位回転で施文される。

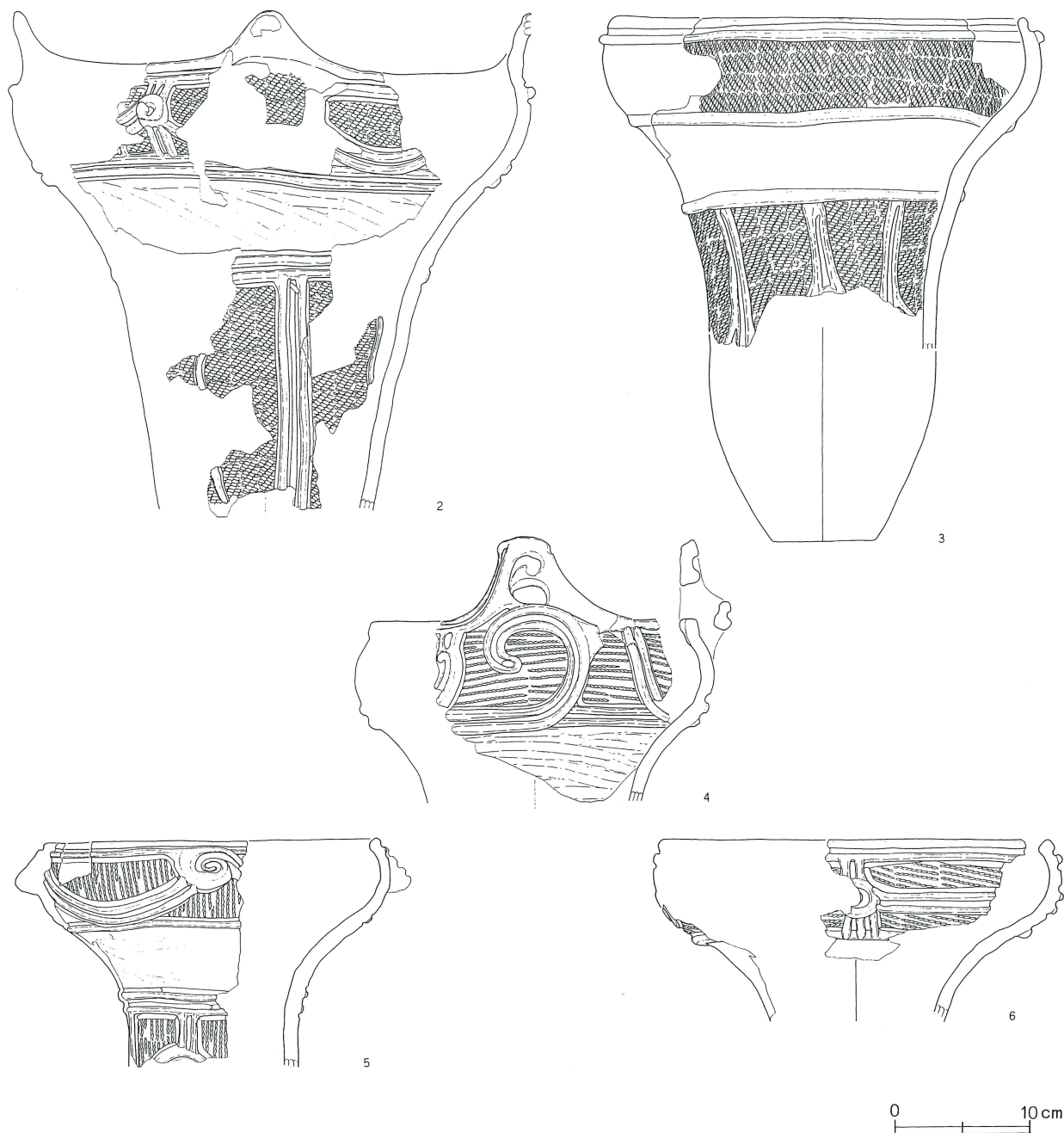
現存高32cm、口径は推定35cm程度と思われる。

第325图 C区第5号住居跡出土土器(1)



0 10cm

第326図 C区第5号住居跡出土土器（2）



3は胴下半部を欠失する。水平口縁で、口縁部文帯は上下の区画のみで、内部に地文のほか何等の文様も描かれない。

頸部には無文帯が存在する。胴部には二本隆帯による懸垂文が垂下し、これから分岐してJ字・渦巻など何らかのモチーフが展開するものとみられる。地文はRL単節の縄文で、口縁部は横位回転、胴部は縦位回転で施文される。口径29cm、現存高24cmを測る。

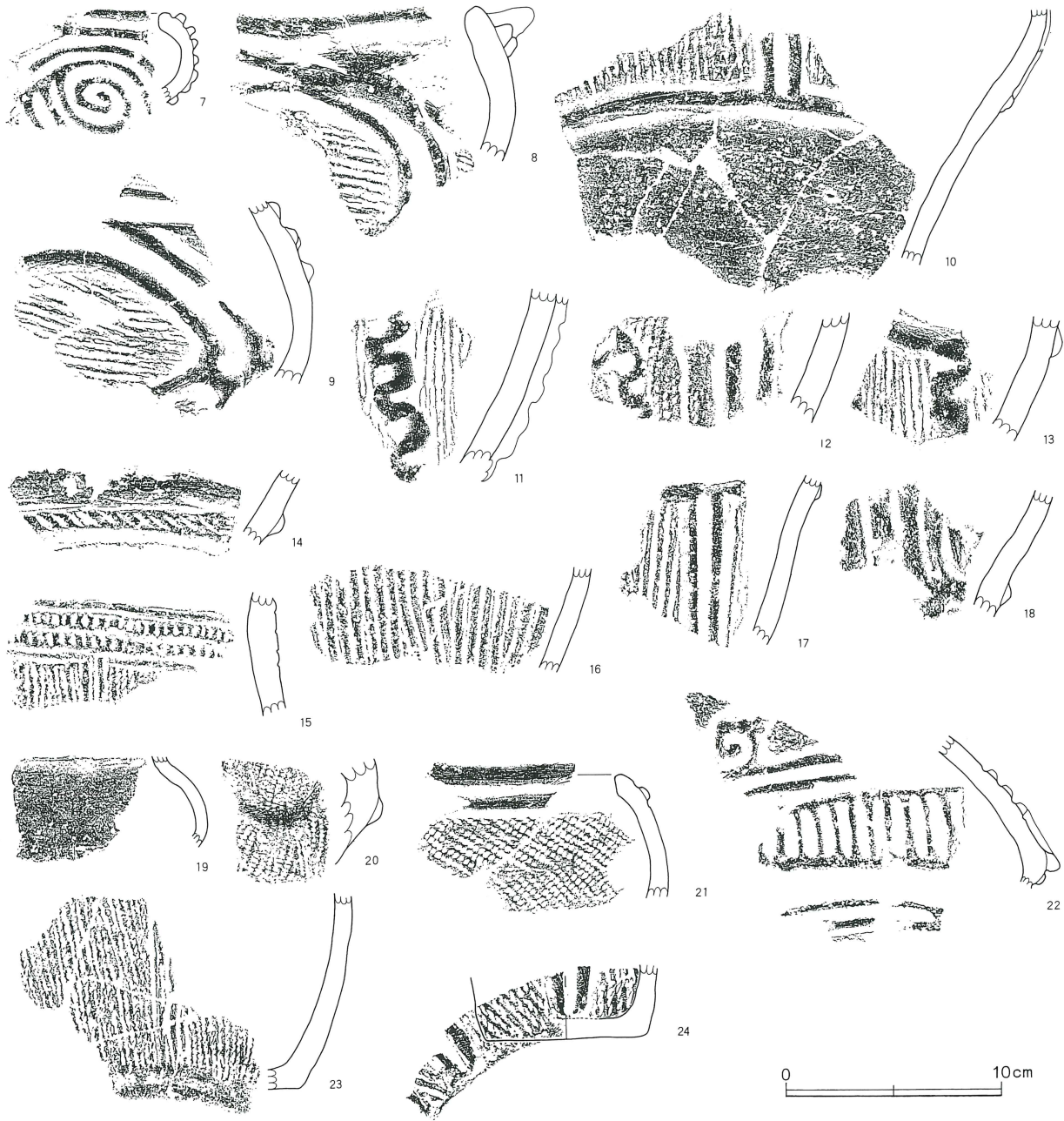
4は唯一、口縁部の中空把手が完存するものである。

二本隆帯による大柄の渦巻文が立体化して口端上の突起と融合し、透かし彫り風の把手を構成している。地文は横位の撚糸文である。頸部には無文帯が存在する。

5は胴部中段から下を欠失する。口縁部には繫弧文が描かれ、頸部には無文帯が存在する。胴部には二本隆帯の懸垂文と、これから分離した渦巻文が展開するものとみられる。地文は縦位の撚糸文である。

6は直線化した繫弧文である。口縁部から頸部の無文帯にかけて残存する。地文は横位の撚糸文である。

第327図 C区第5号住居跡出土土器(3)



7は強く内湾する口縁である。隆帯+沈線による渦巻文が描かれる。8・9はキャリパー類の口縁部で、二本隆帯による大柄の渦巻文が描かれ、地文は横位の撚糸文である。21は3の個体に類似の口縁である。

10は頸部を中心とした大破片で、口縁部文様帯の下端の区画と、頸部無文帯がみられる。地文は縦位の撚糸文である。11~13は蛇行する隆帯懸垂文で、交互刺突を伴っている。12は二本隆帯の懸垂文と併用される。13は隆帯の渦巻文の下端から蛇行懸垂文が垂下する。

14は斜位の刻みを伴う横位の隆帯で、頸部無文帯と胴部との境を区画するものと考えられる。15は胴部中段で、半裁竹管状工具による平行沈線が横位に巡る。地文は縦位の撚糸文である。16・17は二本隆帯による懸垂文の垂下する胴部である。18は中峠系の深鉢で、縦位の隆帯をはさんで左右に窓枠状の区画が描かれる。

19は無文胴張りの浅鉢である。20は両耳壺の把手で、背面に縄文が施文される。22は胴部中段がくの字に張

り出す浅鉢で、渦巻文の展開する胴上半部である。23・24は深鉢底部付近の破片である。

C区第6号住居跡 (第328図～第332図)

U・V-26区に位置する。隅丸長方形の住居跡で、長径4.65m、短径4.28m、深さは26cmを測る。長軸方向はN-6°-Wを指す。

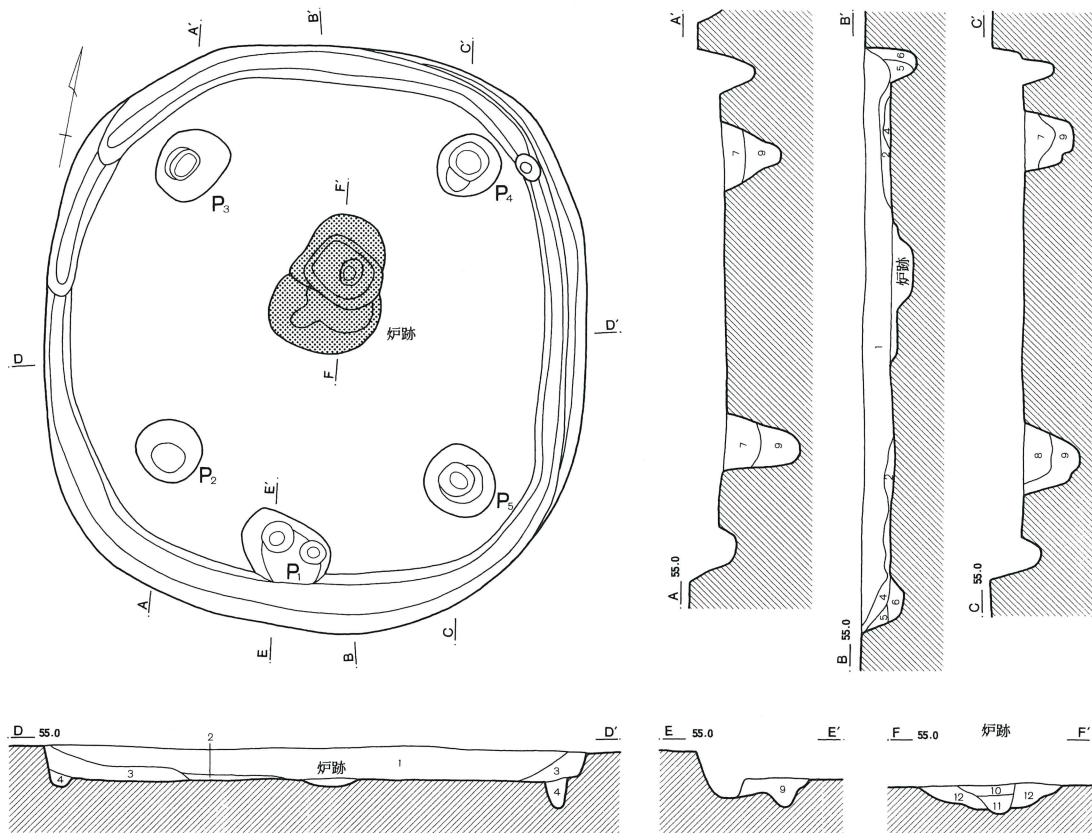
床面はほぼ平坦で、炉跡周辺ではいくぶん高く、南西壁付近では低くなっている。壁溝は途切れることなく1巡し、重複はみられない。

隅丸長方形プランの各コーナー付近に1本ずつ、計第328図 C区第6号住居跡

4本のピットを検出した。深さは40~60cmを測り、典型的な4本主柱を示している。

主軸線上の床面南端に出入り口施設の痕跡とみられるピットを検出した。長径77cmの不整楕円形で、底面は壁溝側に緩やかに傾斜し、住居跡中央寄りに一対の小ピットを伴っている。

炉跡は主軸線上のやや奥壁寄りに位置している。長径1.1m、比較的規模の大きな地床炉で、本来炉石や炉体土器(第330図1?)を伴っていた可能性がある。炉床までの深さは16cmである。



C区S J 6

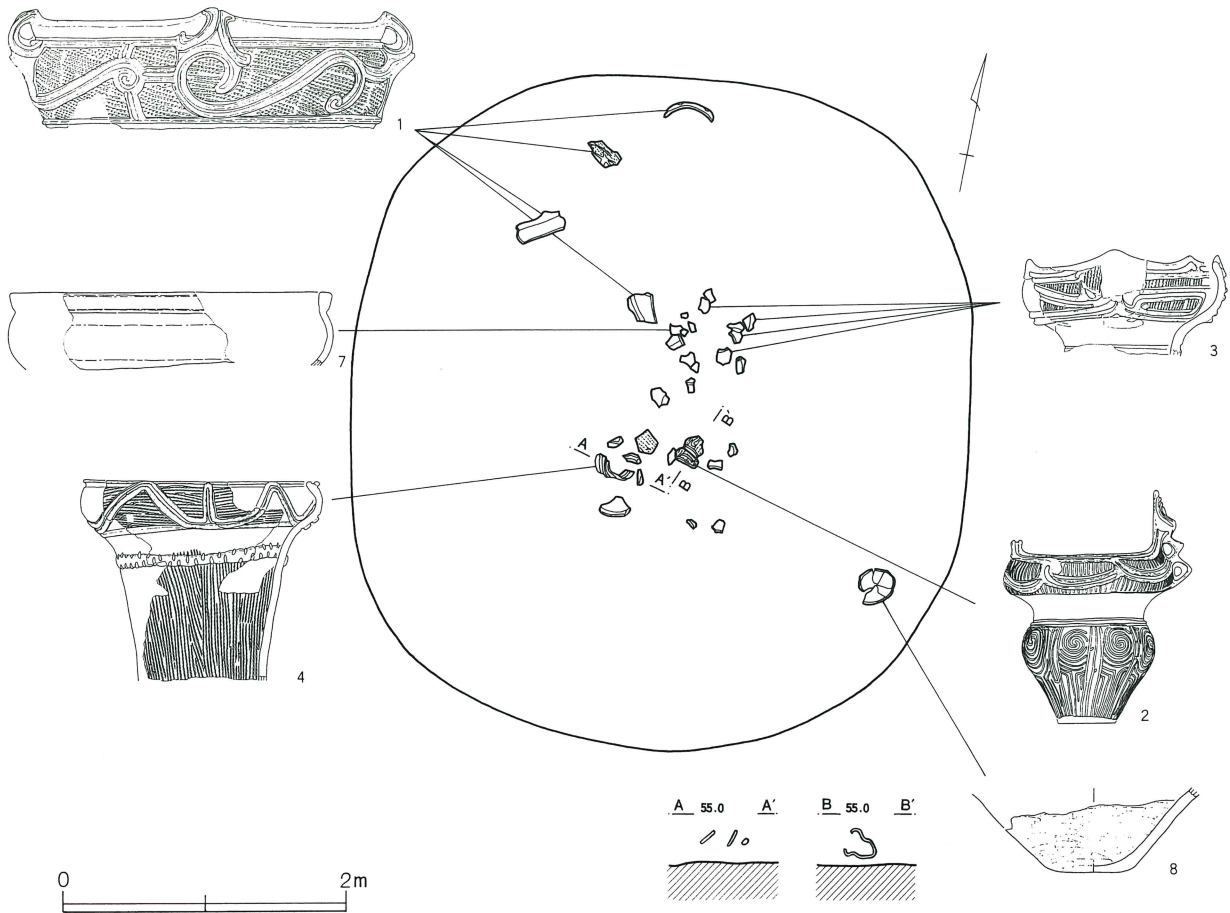
- 1 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子・炭化物若干含む 粘性有り 締まりなし
- 2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性有り 締まり有り
- 3 暗褐色土 : 炭化物少量含む
- 4 黒褐色土 : ロームブロック多量に含む 粘性有り 固く締まっている
- 5 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック若干含む 粘性有り 締まり良し
- 6 暗褐色土 : ローム粒子・ロームブロック極めて多く含む 粘性あり 締まり良し
- 7 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性有り 締まり良し
- 8 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性有り 締まり良し
- 9 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性有り 締まり良し

(炉跡)

- 10 暗茶褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック若干含む 粘性有り 固く締まっている
- 11 暗茶褐色土 : ロームブロック少量、焼土ブロック多量に含む 粘性 欠く 締まり良し
- 12 暗茶褐色土 : ロームブロック・焼土ブロックやや多く含む 粘性有り 締まり良し

0 2m

第329図 C区第6号住居跡遺物分布図



覆土下層を中心に多量の遺物を出土したが、特に床面中央部に大型の破片が集中していた（第331図）。主体をなすのは縄文時代中期後葉の土器片である。

出土土器（第330図～第332図）

1はキャリパー類深鉢の口縁部である。4分割された大破片が、炉跡上から奥壁にかけて散乱する状態で出土した。二次焼成の痕跡は必ずしも顕著でないが、頸部から下だけをきれいに欠失する遺存状態からみて、この土器が本住居跡の炉体であった可能性は高いものと思われる。4単位の小波状口縁で、波頂部にX字状の突起が配される。口縁部文様帯は上下を1条の隆帯によって区画し、内部に二本隆帯による横S字モチーフが描かれる。このS字文の末端と前述のX字突起が融合して中空の把手を形成する。地文は横位の燃糸文である。口径50cm、現存高17.2cmを測る。

2～4・7・8は住居跡中央の遺物集中区から出土したもので、いずれも床面から若干浮いた状態での出

土である。

2は小型精製の深鉢で、底面が輪積みの接合面からそっくり抜け落ちているほかは、ほぼ完形の状態で出土した。二次焼成による器面の荒れが甚だしく、取り上げに際して薬品により器面を補強した。

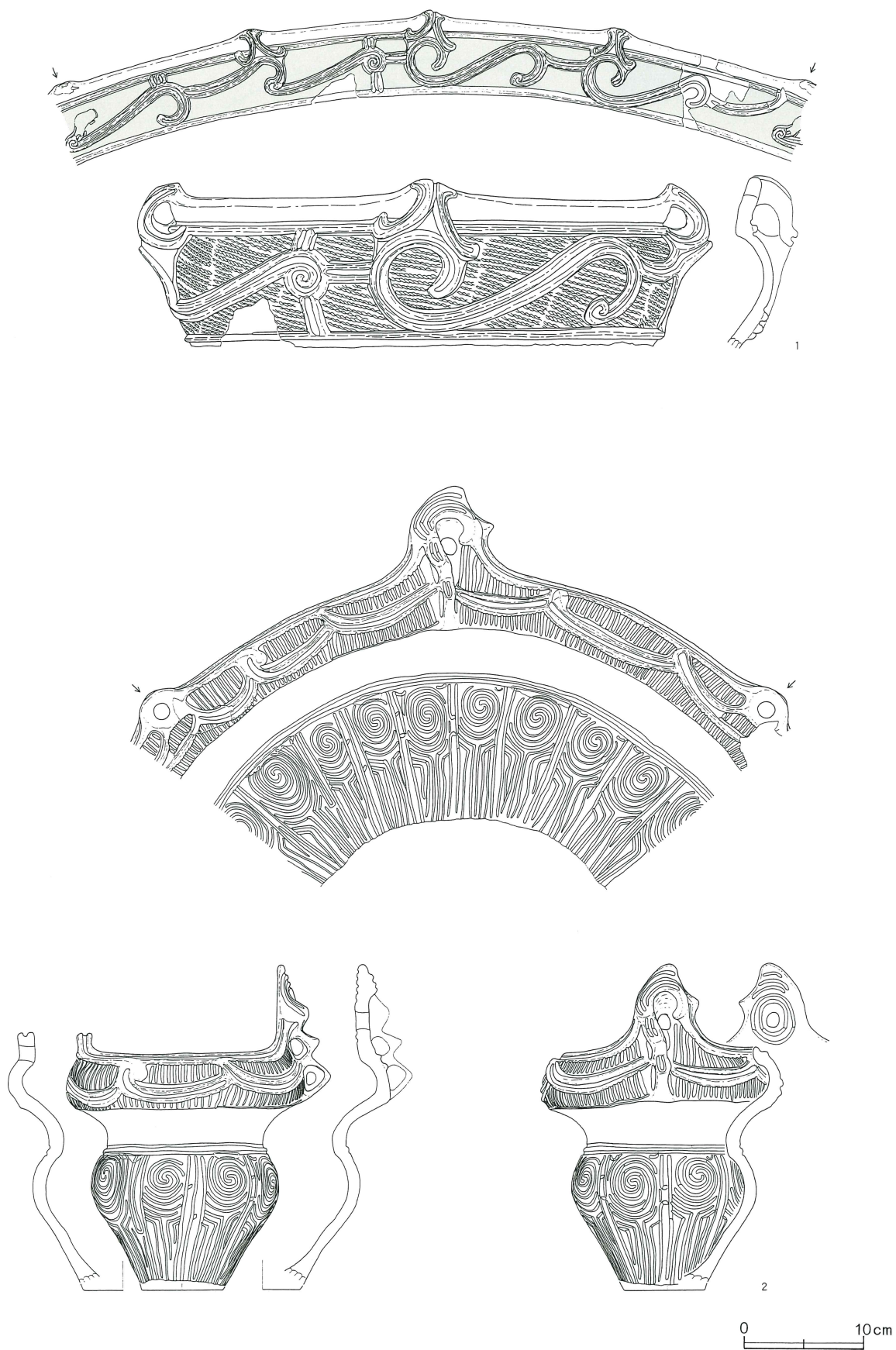
水平口縁で一カ所に中空大型の把手を持ち、この把手と対向する一カ所に貫通孔を伴う小突起が配される。口縁部文様帯は二本隆帯の繫弧文が巡らされ、地文として棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。

頸部には無文帯が存在する。胴部中段のくびれ部分に平行沈線が巡り、頸部の無文帯と胴下半部の文様帯を区画している。

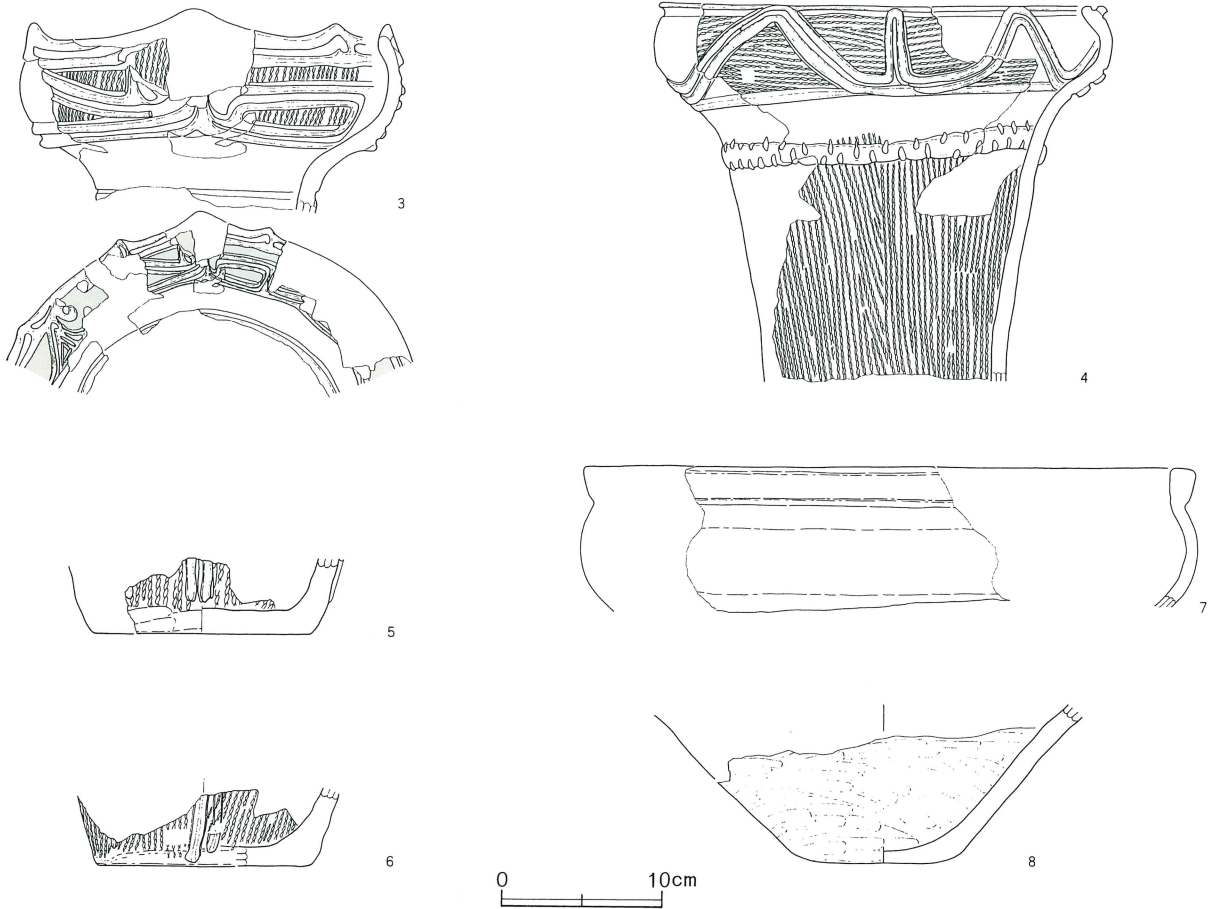
胴下半部の文様帯は縦位の平行沈線によってパネル状の区画に分割され、この区画内には棒状工具による入り組み状の渦巻文が描かれる。

口径19cm、把手を含む現存高32.2cm、底径推定8cm

第330图 C区第6号住居跡出土土器(1)



第331図 C区第6号住居跡出土土器(2)



を測る。

3もキャリパー類の小型深鉢で、頸部から下を欠失する。多単位の小波状口縁を成し、一部は中空の把手を伴っていたものとみられるが、全て剥落して原形をとどめていない。口縁部文様帯は二本隆帯による直線的な入り組み文やクランク文が横位展開するもので、地文は縦位の撚糸文である。頸部には無文帯が存在する。口径21.5cm、現存高11.6cmを測る。

4もキャリパー類の深鉢である。胴下半部から頸部にかけて直線的に開く特徴的な器形で、第5号住居跡出土土器(第326図2)に類例をみることができる。口縁部文様帯は上下を1条の隆帯で区画し、内部には二本隆帯による幾何学文様が描かれる。頸部には無文帯が存在し、胴部との境は交互刺突を伴う扁平な隆帯によって区画する。地文は撚糸文で、口縁部は横位、胴部は縦位回転で施文される。口径26cm、現存高23.2cmを測る。

5・6は深鉢底部である。いずれも二本隆帯の懸垂文が垂下し、地文は縦位の撚糸文である。

7は無文胴張りの浅鉢である。8も同様の浅鉢の底部と思われるものである。

9・10は勝坂系の土器である。9は刻みを伴う隆帯によって区画文が描かれる。10は口縁部で、口縁下に刻みを伴う隆帯によって半月形の無文帯が形成される。地文は縦位の撚糸文である。

11~16はキャリパー類深鉢の口縁部である。11・12は波状口縁で11は中空把手を伴うものであろう。その他は水平口縁である。17~22は口縁部文様帯の一部で、18は斜位の刻みを伴う隆帯で文様帯下端を区画し、頸部無文帯を持たない。

23~27・29は隆帯懸垂文の胴部から底部である。28は地文撚糸文上に半裁竹管状工具による横位の平行沈線が巡る。30~36は地文撚糸文のみの胴部である。37は撚糸文の施文される底部である。